



ISSN 2432-9576

ENSG, No.7, 2023 年 11 月発行

ENSG

(Ethnicity, Nation, State, and the Globe)

No.7

エスニック・マイリティ研究 第7号

エスニック・マイリティ研究会 2023 年11月

『エスニック・マイノリティ研究』第7号

目次

論文

- 郭小櫓の*A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*にみられるグローバル化と断片

—— JA 日下 —— p.6

エッセイ等

- 2023年夏チェコ再訪記：コロナ、ウクライナ戦争を経て

—— 森下 嘉之 —— p.37

- 送り出しと受け入れとの狭間で：2023年秋のブダペシュトにて思うこと

—— 辻河 典子 —— p.41

会員近況 —— p.47

執筆者一覧・編集後記 —— p.49

論文

郭小櫓の *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers* にみられるグローバル化と断片

JA 日下

【要旨】 中国出身でイギリス国籍を持つ作家兼映画監督、郭小櫓（英語での活動名 Xiaolu Guo）が 2007 年に出版した小説 *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers* では、中国からの留学生主人公 Z がパーソナルな辞書作成を通じて、断片化したイギリスでの生活（孤独・異文化間の相違・不慣れな土地での生活）を自分なりに解釈/整理し、理解可能な世界にまとめ上げ、心の安定を得ようとする。しかし最終的に Z が気づかされるのは、グローバル化時代の世界で生きていくために必要なことは簡潔な理解ではなく、断片同士の寄せ集めやそれらの複雑な結びつきから成る世界を受け入れる姿勢である。同小説における辞書は、各項目が断片として存在し、それらが一定の規則で結びつくことで一つの世界を構成していることから、Z による現代の世界認識の表象であると同時に、グローバル化時代における生き方の比喻にもなっている。断片の寄せ集めを描くために、同作品には郭が以前から知的影響を受けてきた西洋の知識人、とりわけロラン・バルトの著作の影響を見てとることができる。

【キーワード】 郭小櫓 (Xiaolu Guo) , *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*, グローバル化, 断片

1. はじめに

2023 年 4 月 13 日にロンドンの大英図書館で開催されたトークイベントにおいて、作家兼映画監督の郭小櫓（英語での活動名 Xiaolu Guo）は、自身の作品が「断片的な fragmentary」世界を描いていると述べ、その理由として現代社会および世界が断片的であるという事実を反映させたいからだと言った。同イベントは 2022 年 11 月 18 日から 2023 年 4 月 23 日まで大英図書館で開催された、英中間の文化交流や移民史を考える、展示物を含む一連のイベント《Chinese and British》の一環として行われたものである (British Library)。郭はこれまで執筆した作品や記事の題名に「断片 fragments」という単語をしばしば用いてきたように、断片という言葉にある種のこだわり持ってきたことは間違いない¹。郭は 2023 年の『ガーディアン』紙でのインタビューでも「私の人生では未だに世界がとても断片化している the geographies of my

¹ 題名の例として、2008 年出版の小説 *20 Fragments of a Ravenous Youth* や同 2008 年に『インデペンデント』紙に寄せた記事“Writer Xiaolu Guo: Fragments of My Life”などが挙げられる。

life are still very fragmented」と述べ、断片化という言葉を使用しつつ、「中心を失った You lose your centre」自分のアイデンティティをジェンダー的な解放と結び付けて語っている (Guo “Xiaolu Guo: ‘It Would Be Tacky to Ask’”) ²。

郭は 1973 年中国浙江省の小さな漁村石塘 (Shitang) で生まれ、北京の映画アカデミーで学んだ後、2002 年にブリティッシュ・カウンセルの留学プログラム、チーヴニング奨学制度 (Chevening Scholarship) で渡英し、現地の映画制作学校に通った。以後ビザ延長などをおこない、現在に至るまでロンドンで暮らしている³。現在はオーストラリア出身のパートナーとの間に娘がおり、ロンドン東部のハックニーに自宅を構えている。イギリスや別宅を所有するドイツを主な芸術活動の拠点にしながら、アメリカ合衆国やフランスなどの世界各地をめぐりつつ執筆活動や映画制作をおこなう現代芸術家である。また、映画制作時にはしばしば中国にも帰国している。

郭は渡英以前から中国国内で中国語による作品 (小説・映画・テレビドラマの脚本が中心) を執筆し、芸術家として既に一定の活動をおこなっていたが、渡英後は執筆活動は一貫して英語でおこなう一方、映画監督としては中国語による作品も発表して国際映画祭に出品しているのが、郭が芸術家としての活動で使用する言語に関する大きな特徴の一つとなっている。自らの使用言語に関して、郭は前述の大英図書館でのトークイベントで「私は三十歳の時にイギリスにやってきましたが、それは十三歳で留学するような場合とは大きく異なっていました。中国語は世界で話者の多い一大言語ですが、英語圏に移り住んだことは当初想像していたようなメジャー言語の使用からマイナー言語の使用という変化ではなく、メジャー言語からメジャー言語への変化であり、それがもう一つの大きな言語圏に自分を適応させなければならない大きな挑戦にもなりました」と述べている⁴。

郭は中国で暮らしていた青年期から愛読・愛聴していたジャック・ケルアックらアメリカのビート世代の詩人、映画監督ジャン＝ラック・ゴダールら 1950 年代末からのフランスでの映画運動ヌーヴェルヴァーグ (La Nouvelle Vague)、そして同フランスのロラン・バルトらポスト構造主義者の影響を強く受けてきた。加えて、ウォルト・ホイットマンら 19 世紀アメリカで自由を歌った詩人達の自由な詩の形式や内容に、中国の共産主義社会や性の不平等、閉鎖的で家父長的家庭生活には見いだせない自由を感じたという (Guo 2017, 152)。郭自身、自らの知的文化の拠り所は西洋にあると発言しており、その作品の構成や主題には上記の芸術家や思想家からの影響が色濃く出ている。事実、本稿で扱う郭が 2007 年に出版した小説 *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers* (以下 *Dictionary for Lovers*) も、バルトの『記号の帝国 *Empire of Signs*』や『恋愛のディスクール：断章 *A Lover's Discourse: Fragments*』を構成の面でかなりの程度模倣しており、後述のように思想的にも影響を受けている⁵。知的・思想的・芸術的なインスピレーションとしてのバルトの影響について、郭は著書やインタビューなどで度々触れているが、バルト

² 以下、英語からの訳は全て著者による。

³ 郭は 2014 年にイギリス籍を取得した際に中国籍を失っている。

⁴ 同発言はイベントに聴衆として参加した筆者による手記を日本語訳したもの。

⁵ 郭の作品全般に見られるもう一つの傾向として、自身の自伝的体験を基に構想したプロット展開がある。例えば、自身のイギリスへの留学体験、幼少時に受けた性的暴行、恋人からの暴行、墮胎、母親から受けてきた冷淡な扱いなどが挙げられ、これらの出来事が度々作中に登場する。自身の実体験は 2017 年出版の自伝 *Once upon a Time in the East: A Story of Growing up* (アメリカ合衆国で出版された版では、内容は同じであるが *Nine Continents: A Memoir in and out of China* という別の題名が付いている) および数々のインタビューの中で語られている。

は北京の映画アカデミーで『恋愛のディスクール：断章』の中国語版を読んで以来の重要な存在となっている。

Barthes was one of the very important ones when I was studying film writing; [he offered] a different type of narrative, of fragments—not a complete narrative. [...] I guess reading two works by Barthes really told me how the Western cultures see the Eastern cultures and how, actually, these cultures are different. (Guo “Translating Love in the Time of Brexit”)

[訳：バルトは、映画の脚本執筆を勉強していたときからの非常に重要な人物の一人でした。自己完結した語りではない、それとは異なる、断片化した語りの有り様を（示してくれたのです）。[中略] バルトの二作品を読み、西洋文化が東洋文化をどのように見ているか、そして実際に両者がとても違うことがよくわかったように思います。]

これに続けて郭は、*Dictionary for Lovers* および 2020 年出版の小説 *A Lover’s Discourse* の執筆を通じて「自分自身と向き合い、バルトと向き合う court myself and court Barthes」とも発言している。

それでは郭はグローバル化の時代にどのような断片化を見出し、それがどのように作品で表現されているのであろうか⁶。郭が知的影響を大いに受けてきたバルトは『記号の帝国』の中で断片を「何物によっても固められたり、形を与えられたり、方向性を与えられたり、終わりを与えられうるものではない、あるいはそうされるべきものではない—握の出来事の数々 a dust of events which nothing [...] can or should coagulate, construct, direct, terminate」と定義している (Barthes 1983, 78)。本稿は郭が英語で執筆した最初の小説 *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers* を取り上げる。作中でイギリス人の恋人が、中国からの留学生である主人公にヨーロッパ旅行を勧める時、将来の旅行計画を楽しそうに話す、恋人が享受する自由な移動とは対照的に、主人公は中国人であるためビザの問題から世界各地を移動し、国境を越えるのには多くの制限が伴う。また、主人公はイギリスで暮らす自分を「第三世界の顔をしている者 a face of third world」とも形容する (Guo *Dictionary for Lovers*, 154)⁷。こういった描写や叙述は、グローバル化の時代に人々が体験する断片化とどのように結びつくのだろうか？本稿は、中国出身の主人公ジュアン・シアオ・チアオ (Zhuang Xiao Qiao：イギリスにやってきて早々、主人公は自ら Z と名乗るようになり、以下本稿でも Z と呼ぶ) が初めての海外生活の中でグローバル化の時代の断片化をどう体験し、理解していくのかを、彼女が辞書形式を模して毎晩日記を綴るという行為に着目して論じていく。それにより、断片に関するバルトの定義に見られる方向性や形の無い生き方、つまり不安を感じ漂うことを受け入れる姿勢を同作品に読み込むことを目指す。異文化との出会いを通じての人々の相互不理解や戸惑いを描いた越境文学の作品は数多く存在するが、その中でも郭に特徴的な点は、明確に断片化という言葉を用いてこうした現象や心理を描写し、分析していく所にあるといえるだろう。

2. グローバル化社会と断片化

⁶ 断片化に関する話から敷衍して郭は大英図書館での同イベントで、自身の作中の各章やセクションが短いことにもふれている。理由の一つとしてソーシャルメディア的なスタイルを用いていることを挙げた一方で、長い文章を一度に書くことが得意ではないとも認めた。

⁷ 以下、頁番号のみの場合はすべて *Dictionary for Lovers* からの引用とする。本小説の主人公はスペルや文法ミスが多い英語を話す（書く）が、本稿でもこの英語を訂正せず原文通りに引用する。

現代のグローバル社会ではコスモポリタニズムという言葉を代表に、ビジネス・芸術・ファッションなど多岐にわたる分野で国境を跨いだ活動やボーダーレスな姿勢を賛美する傾向が強い。例えば、アンジェリア・プーン (Angelia Poon) は、グローバル化の現代を表現する言葉として、流動性、境界の消滅や人や物の流通などが挙げられると述べる。

In public and academic discourses, it is the metaphors of flow and fluidity that has most visibly dominated descriptions of the historical phenomenon we think of as contemporary globalisation. It has become axiomatic to speak of national borders dissolving and leading to the worldwide circulation of goods, people, information, images and cultures. (Poon 1)

[訳：公的および学術的な言説において、流通と流動性こそが我々が今日のグローバル化とみなす歴史的現象を記述する際に目に見えて主流となっている比喩である。国境が消失し、それが商品、人、情報、イメージ、文化の世界的な流通につながると語るのは自明のこととなっている。]

しかしその一方で、グローバル社会において断片化の話は無縁ではないどころか、むしろ重要でさえある。グローバル化の時代における断片化の話でおそらく真っ先に想起されるのは、幾つかの国で顕著になっている国粋主義的な政権や政党の台頭や、ロシア、中国、ベラルーシなどにおける長期独裁政権の確立であろう。さらにはイギリス等の国々で実施もしくは検討されている移民制限に関する政策も、グローバル化の時代において地域や国境を越えた人・物・思想の移動や流入、影響の流れに制限を加えようとする世界の断片化の傾向として挙げられるだろう。イーヴァ=カイス・プロコラ (Eeva-Kaisa Prokkola) はインターネットなどのコミュニケーション手段が増々世界のボーダーレス化を推し進めていくことにふれた後で、国境の存在が人々の行動や思考に違いをもたらすという点で分断もたらすと指摘する。

Once a border and the accompanying state institutions have been established, they often gradually become an inseparable part of the spatio-temporal activities and mindscapes of citizens. Discontinuity in peoples[sic] mundane activities—even in the activities of mobile transnational groups—show that state borders still greatly channel our activities and create order in the ‘borderless’ world. (Prokkola 21)

[訳：国境とそれに付随する国家機関がひとたび確立されると、それらが次第に国民の時空間的活動や心象風景と切り離せない要素となることがしばしば起こる。人々の日常的な活動に不連続性が生じるのは、たとえそれが移動を繰り返すトランスナショナルな集団の活動であっても、国境が依然として我々の活動を大きく左右し、「ボーダーレスな」世界に秩序を生み出していることの証左である。]

フレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) は 1980 年代既に、多国籍資本主義時代において「世界規模での断片化 fragmentation on a global scale」が起こっているという事実に対して我々は真摯に取り組むべきだと述べている (Jameson 67)。文学のいわゆる「正典」と第三世界の文学との関係を論じた文脈でのジェイムソンの指摘によれば、大衆文化を生きる私達の生活は「正典」とはすでにかき離れ、「断片化した社会 fragmented society」の中にはいくつもの生活様式が存在しているが、断片化はそれにとどまら

ず、

We need to be aware that we are even more fundamentally fragmented than that; rather than clinging to this particular mirage of the “centered subject” and the unified personal identity. (Jameson 67)

〔訳：我々はそれよりもさらに根本的に断片化されていることを認識する必要がある。「中心化された主体」や単一の個人的アイデンティティという、この特定の蜃気楼に固執するのではなく。〕

また、コスモポリタニズムに対する批判としてしばしば指摘されるように、グローバル社会は特権階級による国境を跨いだ移動がより頻繁となっている一方で、そうした特権を享受できない人々を置き去りにしている。コスモポリタニズム研究で知られるアシル・ムベンベ (Achille Mbembe) は世界の断片化は、今や疑いようもないほど世界で市場経済や資本主義が主流となったことに起因していると指摘する。

The time of the market, especially under the current capitalist conditions, is a time that is very fragmented and the time of consumption is really a time of the instant. (Mbembe)

〔訳：市場の時代は、特に現在の資本主義状況下において、極めて断片化した時代であり、消費の時代はまさに即時性の時代である。〕

ムベンベは資本主義が社会階層の分断に拍車をかけると同時に、人々がより即時的な物を求めるようになることで、人と人との結びつきが希薄になり、一つ一つの体験が断片化していると語る。ムベンベは続けて、21世紀初頭の世界情勢が地域同士の分断を作り出しているとも指摘する。ここでの彼の発言は専門であるアフリカと西洋の関係に焦点を当てたものとなっているが、同様の議論をヨーロッパとその他の地域との間にも当てはめることが可能だろう。

The obsession with boundaries and visas, the emergence of racism in most parts of Europe, the strengthening of right wing parties in the context of an economic crisis that is quite obvious—all of that has been detrimental to the development of productive and mutually beneficial relations between Africa and Europe. (Mbembe)

〔訳：国境やビザへの執着、ヨーロッパのほとんどの地域での人種差別の出現、かなり顕著な経済危機を背景とした右翼政党の支持拡大—これらすべては、アフリカとヨーロッパの生産的かつ相互に有益な関係の発展にとっての妨げとなってきた。〕

ムベンベの議論とはいくぶん文脈は異なるものの、グローバル化の時代における多様性の議論として、ウォルター・ミニョーロ (Walter D. Mignolo) もコスモポリタニズムの一つの有り様として多様性の重要性を指摘している。ミニョーロはコスモポリタニズム研究の中で、西洋中心のコスモポリタニズムではなく、地域毎の特性に根差したコスモポリタニズムを提唱し、それを「批判的コスモポリタニズム critical cosmopolitanism」と呼ぶ。ミニョーロによれば、コスモポリタニズムの歴史は16-17世紀のスペイン・ポルトガルによる植民地化の開始とキリスト教の布教に始まった。そして20世紀後半のアメリカによるトランスナショナルでグローバルな植民地化と近代化までの間、西洋という一部のローカルな歴史がグローバルデザイン (ルネサンス・キリスト教・啓蒙主義・近代性・植民地性など) を生み出し、それによっ

て世界を均質化し、管理的な「上からのグローバル化」がおこなわれてきた (Mignolo 735-41)。さらには今日のネオリベラリズムと、トランスナショナルな市場化がナショナルなプロジェクトに取って代わりつつある新たな文明化が、国際法や弁証法など、西洋中心主義的に世界を均質化しようとする危険性に対して警鐘を鳴らし批判することへの障害にもなっているとも警告する (Mignolo 725)。そう指摘したうえでミニョーロは、グローバルデザインの外からの批判ではあるが、資本主義や近代性とは無縁の存在からの批判ではなく、むしろそれらの周縁もしくは境界線に置かれ、内包されるべき存在からの視点 (たとえばポストコロニアル的、あるいはサブアルタ的な視点) として、多様性を規範とした批判的コスモポリタニズムを掲げる。これはコスモポリタニズムや民主主義がもはや一つの視点のみから語られるわけでも、右翼や左翼といった単一のロジックや言説で語られるものでもなくなっていることや近年のアフリカからヨーロッパへの移民やラテンアメリカから合衆国への移民を背景として生まれた、トランスナショナルで、そしてポストコロニアルな社会の推進に今必要なもの、つまり多様性をコスモポリタニズムの核とした新たな姿勢なのである (Mignolo 740)。

3. 小説 *Dictionary for Lovers* の分析

郭が 2007 年に発表した小説 *Dictionary for Lovers* は、イギリスで作家として生きていくために郭が決意した英語での執筆による自身初の作品となった。同作品では、中国からの留学生 Z が体験する人生初の海外生活での異文化間の戸惑いやイギリス人の恋人との価値観の相違によるすれ違いが、Z が日々綴る一人称の日記形式で書かれている。*Dictionary for Lovers* の大きな特徴として挙げられるのが Z の英語である。Z の拙い英語を表現する方法として、作中 Z は文法や綴り等の英語のミスを繰り返す。そうしたミスが作品にはそのまま書かれているため、読者は英語のミスを含んだ文章を読むことになる。約 1 年間のイギリスでの語学留学を追った同作品では、物語が進むにつれて Z の英語のミスも減少し、それにより読者は Z の目を見張るような英語の上達を感じることができるようになっている⁸。

Dictionary for Lovers のもう一つの大きな特徴として、章やセクション構成が挙げられる。各セクションはそれぞれ英単語一つが表題として選ばれており、題名の下に辞書的定義の引用が記載され、各セクションの内容自体は表題と関連した Z の個人的体験が記されている⁹。いわば Z による日記と称したパー

⁸この日記には冒頭のプロローグで、この時点ではまだ出会っていないはずのイギリス人の恋人への呼びかけ「この時まで出会っていないあなた。未来のあなた I not met you yet. You in future」がある (3)。この一節は明らかに Z が恋人と会った後の時間軸で書かれており、プロローグの時点でヒーロー空港へと向かっている飛行機の中で Z が書いたものではない。だとすれば、これまでの研究者が論じている以上に Z の日記は出版にあたって編集の手が加わっていることになる。例えばウラ・ラーベック (Ulla Rahbek) は、Z が突然中国語で書きだした箇所の直後に編集者による英語訳が挿入されていることにふれ、読者は最初 Z の日記をオンタイムで読んでいるという感覚を持つのだが、編集者の英語訳の箇所に来た途端に Z の英語自体が編集されたものなのではないかという疑念を持つようになると指摘している (Rahbek 4-5)、この意見は再考を要するだろう。また同論文の冒頭場面は、英語が上達した時点での Z が意図的に文法的に拙い英語で書いているか、もしくはこの一節だけ後から追加されたと推測され、読者は Z のイギリスでの暮らしをライブ感覚で読むのではなく、ある程度過去の記録として編集されたものとして読むべきといえるだろう。事実、Z はイギリス人の恋人の発言は文法や語彙の点で正確な英語を日記に書き留めており、これは Z の英語力を考えると現実的ではないものになっている。

⁹例外として Z のヨーロッパ旅行が記されている (「九月 September」の章) は、Z が次から次へと訪れるヨーロッパの都市名がセクションの表題になっており、辞書形式ではなく旅行記形式になっている。

ソナルな辞書作成となっているのだが、Zの個人的体験はけっして辞書的定義通りにいくことはない。小説の題名にはコンサイス (concise) という言葉が含まれているが、Z自身が「簡潔 (concise) というのはシンプルで明瞭って意味 Concise meaning simple and clean」(10)と語るのとは対照的に、Zが留学体験や異文化との接触を通じて知ることになるのは、まさに世界や異文化交流は、Zが辞書的と信じるような決して理路整然と整理・分類されうるものでも、ましてや簡潔でもないことである。

郭とのインタビューを通じて、ジャン・ジェン (Zhang Zhen) は郭の作品には自伝的要素が強く感じられる一方で、20世紀末もしくはいわゆるグローバル化の時代に成人となった中国人の世代全体の息苦しさも表現していると論じる (Zhen 46)。以下、*Dictionary for Lovers* の分析を通じて私達は、同作品が個人個人が互いを理解することができずにバラバラになって断片化するのか、それとも異文化コミュニケーションは辞書編纂のごとく理解可能なものとして整理・分類されうるかの両者の緊張感を感じながら、主人公 Z が断片化の不安を引き受けつつ、世界の複雑さの中を漂う覚悟を感じるに至る成長の物語として読んでいく¹⁰。

3.1 あらすじ

本論を展開する前に、小説のあらすじを確認しておきたい。*Dictionary for Lovers* は、中国出身の語学留学生 Z が毎晩綴る日記を読者が読み進める形式で話が展開する。時折日記内でイギリスで知り合い、恋人となった男性への語りかけがおこなわれるがこの男性の名前は作中で明かされることはなく、「あなた you」という呼びかけのみになっている。Zは中国の温州 (Wen Zhou) 出身で、渡英時点では23歳の女性である。本名は Zhuang Xiao Qiao だが、「西洋の人々は自分の名前を発音できない」からという理由で、自ら Z と名乗るようになる¹¹。中国では公務員として故郷で働いていたが、両親の指示でロンドンの語学学校での留学に参加することになる。Zの両親は元々温州の農民だったが、のちに畑を売却して靴作りを始め、やがて靴の工場経営に成功し、財を成した (5, 12)。娘に留学させたのは、将来海外との取引が一層盛んになることを見越して、身につけた英語で経営に役立ってもらいたいという意図からであった。物語自体は Z が初めての海外生活のためヒースロー空港に到着することから始まり、語学学校に通う2002年2月からの1年間¹²の生活や体験がZの視点および語りで描かれる。ただし授業風景はほとん

¹⁰ *Dictionary for Lovers* を Z の成長物語、つまり教養小説 (Bildungsroman) として読むべきだと指摘する研究者は少なくない (e.g. Rahbek; Sinoimeri)。同小説のジャンルについては、施東來 (Flair Donglai Shi) は中国人ディアスポラ文学と、中国で既に確立している「留学生文学 liuxuesheng wenzue」の間に位置づけられると論じている。(Shi 7)。それに対してレイチェル・ギルモア (Rachael Gilmour) は「翻訳文学 translational literature」(Gilmour 210)あるいは「トランスリンガルな教養小説 translingual bildungsroman」(Gilmour 222)として位置づけられると主張する。また、スージー・トマス (Susie Thomas) は「フェミニズム的移民教養小説 feminist Bildungsroman of migration」であるという見解を示すなど、同作品に関するジャンルについては様々な意見が存在する。

¹¹ 作中に挿入されているパスポートのページには本名 Zhuang Xiao Qiao が記載されている (4)。Zは自らフルネームで自己紹介することを諦めており (e.g. 18, 48)、作中に明記されていないが、イギリスに来てから度々本名を正しく発音してもらえない体験があったことがうかがえる。ただし、語学学校のマーガレット先生 (Mrs Margaret) はZのことをきちんと Ms Zhuang と呼んでおり、話し相手の文化を尊重しようとするイギリス人も作中に登場してはいる。

¹² 2002年という時代設定は、Zのパスポートの一部に1979年7月23日生まれと記載されており、さらにZが自ら23歳だと語っていることから推察できる (4)。また、当時の実際のイギリスの世情としてイラク戦争へのデモやトニー・ブレア首相への言及 (28-30)、さらにはパブの屋内で煙草を吸っている人々がいる (87) ことなどからも時代設定を読み取ることができる。2002年に初めて渡英するとい

ど描かれることがなく、物語の大半は授業外での Z の日常生活、特にロンドン散策や「あなた」との会話、物語後半のヨーロッパの都市をめぐる一人旅が描かれている。また、作品全体の構成として「2月 February」から始まる各月が、プロローグとエピローグを除いた章のタイトルになっており、最終章のタイトルが翌 2003 年の「2月 February」となっているように、読者は Z のイギリスおよびヨーロッパでの一年の生活を月毎に追っていくことになる。

Z は初めての海外生活に加えて英語への自信の欠如からロンドンでの不安な日々を送る。「あなた」とはロンドンのサウス・ケンジントンの映画館でたまたま一緒に映画を見ていた観客同士として出会い、やがて恋人になる。「あなた」の「うちに遊びにおいで Be my guest」という言葉を Z が「うちで暮らそう」という意味に誤解したことがきっかけとなり、Z と「あなた」との同棲が始まる。「あなた」は 44 歳で Z とは年が 20 歳以上も離れていることが記されている。実際の「あなた」は労働者階級出身のヒッピー風な男性でしかない彫刻家であるが、「あなた」のことを Z は度々「高貴だ noble」と形容する (79)。それは Z が「あなた」の話す英語に惹かれたところが大きく、事実 Z は「美しい言葉を話す beautiful language」ことや「ゆっくりと話してくれるので言っていることがだいたい分かる I almost hear every single word because you speak so slowly」安心感、そして肉体的に美しいと思ったと語る (59, 61)。言語に関しては、英語を使うことはネイティブにとって苦ではなく、取り立てて「高貴」なことではないとパブで会う男性に指摘される始末であるが (87)、英語を流暢に話すことに美意識を感じることは、Z が自分がイギリスで根無し草だという不安の裏返しとして、英語能力の高さをイギリス社会への所属の証と認識しているからであると理解できる。

付き合いだした頃は仲が良く、頻繁におこなう性行為を通じて「あなた」との身体的一体感を感じていた Z だが、やがて価値観の相違から言い争いが絶えなくなる。言い合いの原因となった話題は《チベット領有問題》といったセンシティブな政治問題から、食生活（「あなた」は小食でベジタリアンであるのに対し、Z は大食漢で肉類を好む）、そして《有名になりたいか》という人生観まで多岐にわたる (181-83)。Z の価値観が幼少時からの中国での生活を通じて形成されていった点や彼女のイギリスでの移民としての立場が大きく関わっていることを考慮すると、二人の言い争いは個人の価値観の違いによるものであると同時に文化的な違いを内包しているといえる。例えば、食生活に関しては Z が肉を食べることの大切さを知っているのは、家父長的家庭で育ったため肉に箸をのばすことができたのは父親だけだった故の現在の食への飢えと憧れがあり (127)、Z が「有名になりたい」と願う理由は、自分はイギリスでは何かをできる人にならないと認められず、居場所がないという移民の切実な状況を反映しているからである。

That because you are a white English living in England and you own the property and you have social security. You are boss of yourself, so you have dignity. But I don't have anything here in your country! I have to struggle to get these things! (184)

〔訳：それはあなたがイギリスに住む白人系イギリス人で、家があって、社会的保障があるからでしょう。あなたは自身のボスでいられて、尊厳がある。でもわたしはここあなたの国で何も持ってい

う設定は郭自身の体験と一致するが、Z の人物像や留学に関する細かな設定に関しては大きく異なり、そのため同作品を自伝小説と呼ぶのは適切ではない。

ない！だからこういったものを手に入れるために頑張らなきゃダメなの！]

両者の価値観の違いは人生観において最も大きい。Z が結婚し家庭を築くといった安定志向を好むのに対して、「あなた」は「漂浪者」と表現されるように、ヒッピー的あるいはノマド的であり、若い時に世界各地を旅しデモに参加もしてきた経験を持ち、現在も定職を持たない(90)。最終的に、知見を広げるためと「あなた」に勧められたヨーロッパ旅行を経て二人は別れることになる。

渡英初期は語学学校で一番出来の悪い生徒三人組の一人として数えられていた Z は、日々の熱心な語学学習のおかげで着実に英語が上達していく。一年後 Z はビザ延長の申請が認められず中国に帰国する。帰国後は母親の反対に背き、故郷での公務員仕事を辞め、作家になることを夢見て北京での一人暮らしを始めたところで小説は終わる。Z が当初安定志向であったことを考えると、安定した職を辞して、故郷を離れるという決意には、後述のように世界を漂い、不安を引き受けるというグローバル化の時代における Z 成りの新しい人生観、心構えが示されているといえるだろう。

3.2 *Dictionary for Lovers* の執筆動機

郭は *Dictionary for Lovers* を執筆した理由を、自伝 *Once upon a Time in the East: A Story of Growing Up* の中で詳細に記している。それによれば、郭はブリティッシュ・カウンシルの奨学金が切れても中国に戻りたくなかったため、ビザ延長をおこなった。生計を立てるため作家活動が続けることにした郭にとって、切実な問題の一つはどの言語で執筆活動をおこなうかということであった。郭が中国語を捨てて英語を選択したのは「イギリスで中国語での執筆を続けた場合、読者がいないこと。さらには、芸術家や思想家達のグループに加わるができない If I continue to write in Chinese I would have no readers here. Besides, I would never create a community of fellow artists and thinkers in my Western life」こと、つまり「文化的、知的孤独 cultural and intellectual isolation」を味わいたくなかったと述べている (Guo 2017, 259)。英語での執筆を選択することを肯定的にとらえることができたのは、郭にとってそれが中国での執筆活動時に苦い思いとなっていた「国家や自己検閲からの解放 free from state and self-censorship」に繋がり、「プロパガンダマシンになることへの自己意識 my consciousness of the propaganda machine」を捨てて自分の書きたいことを書けるようになるという願望の実現でもあったからである (Guo 2017, 259)。

先述のように、郭は英語を用いて執筆した自身初の作品として意図的に文法や語法などのミスを多く含んだ英語で書くことを構想した。郭はそれが自身にとって外国語である英語で書くことの不利を取って利用した結果だと語る。

I would make an advantage out of my disadvantage. I would write a book about a Chinese woman in England struggling with the culture and language. She would compose her own personal English dictionary. The novel would be a sort of phrasebook, recording the things she did and the people she met. (Guo 2017, 259)

[訳: 自分のディスアドバンテージをアドバンテージにしようと考えました。中国人女性がイングランドで文化や言語に悪戦苦闘する話を書こうと。その女性は自分自身のパーソナルな英語辞書を作成するのです。小説自体を一種の単語帳のようにして、女性の体験や出会った人達を記録するかんじに。]

郭が主人公 Z が作中で綴る日記を「Z 自身のパーソナルな英語辞書 her own personal English dictionary」と呼んでいるのは注目に値する。何故なら後述のように、こうした経緯と意図の結果誕生した小説 *Dictionary for Lovers* は、Z の体験が記された日記的性格を持つだけでなく、Z なりに周囲から得られた情報を整理、分類し、そこに一定の秩序を与えようとする辞書編纂作業の性格も見出すことができるからである。当然 *Dictionary for Lovers* という題名は Z が持ち歩いている『コンサイス中英辞典』を指すのではなく、Z の日記そのものを指し、Z はパーソナルな辞書作成を通じて、イギリスの「文化や言語に悪戦苦闘」する中、自身の「混乱 very confused」(258) に秩序を与える営みとして理解できる。また、辞書作成を通じて Z が得ようとした秩序が、Z が好む安定や定住といった傾向に合致していることも見逃してはならない。

「プロパガンダマシンになることへの自己意識」という点においても、作中で Z がおこなうパーソナルな辞書作成は注目に値する。郭は 2023 年出版の随筆集 *Radical: A Life of My Own* の中で改めてプロパガンダマシンという言葉を用いているが、プロパガンダまみれの中国語に新たな息吹を吹き込むために、そして移民という世界の放浪者である自分が自らの母語と向き合っていくためには言語を再編し、「再発明する」必要があると語る。

Yes, how to refresh a major language [Chinese] that is so worn out by propaganda machines? And how to become a nomad and an immigrant in relation to one's language? [...] A writer can truly sabotage or reinvent a language which has been suppressed and ridiculed by colonial sensibility. (Guo *Radical*, 267)

[訳：そう、どうやったらプロパガンダまみれになった主要言語〔中国語を指す〕に新たな息吹を吹き込めるのか。自分の言語に対して放浪者となり移民となるにはどうしたよいか。〔中略〕作家には、植民地的感覚により抑圧され、蔑まれてきた言語を破壊したり、再生したりする真の力があるのです。]

Dictionary for Lovers に特徴的な、Z の拙い英語と彼女の語学力向上の痕跡を章を追うごとに読者が追体験できるという試みに関してフィオナ・J・ドルーガン (Fiona J. Doloughan) が指摘しているように、郭はリック・クレフェル (Rick Kleffel) とのラジオインタビューの中で、同小説で使用されている英語は著者がリライトを重ねて中国語らしく仕上げた英語であることを明らかにしている (Doloughan 84)。またウラ・ラーベック (Ulla Rahbek) は、同小説は郭が渡英初期に書いていた日記を基にしていることにもふれている (Rahbek 5)。既述の通り、*Dictionary for Lovers* 執筆は郭が自身の英語が未熟であることを自覚しつつ、それでもなお英語を用いて西洋の出版市場に参入することで、中国の検閲から逃れると同時に西洋での芸術家/知識人としての居場所を見出そうとした試みである。著者自身が実際に綴った日記を基にしているとはいえ、不慣れな言語での自己表現という点では Z との共通点がある一方、意図的に Z の英語を文法的により多くのミスを入れてみたり、Z の世間知らずな様を強調してみたりと、読者である私達は作品を通じて Z と西洋との距離を意識させられると同時に、著者郭と彼女が生み出した登場人物 Z との間の作られた距離も意識させられることになる。

Z が「拙い英語 poor English」で日記を綴る様子を郭が作中で意図的に試みたことに関して、とくにこの試みに時代的文脈を与える意味で、イブリン・ニエン=ミン・チエン (Evelyn Nien-Ming Ch'ien) が *Weird*

English で論じている内容は大いに関連しているといえるだろう。同書でチエンは、一つもしくは複数の言語を英語と混ぜ合わせて創作した、正書法としての英語の表記や語法とは異なる英語 (“barely intelligible and sometimes unrecognizable English created through the blending of one or more languages with English”) をあえて「奇妙な英語 weird English」と呼び、20 世紀後半から 21 世紀初頭にかけて、小説家、劇作家、詩人らが作品に政治的メッセージとして「奇妙な英語」を用いることが増えていると指摘している。こうした「パフォーマンス」は「自身の共同体を書きこみ、それによってアイデンティティ形成する挑戦 they are daring to transcribe their communities and thus build identities」として理解されうる (Ch'ien)。さらに、チエンは以下のような鋭い指摘をする。

Because weird English possesses the extra dimension of a foreign language, it requires not only interpretation but also translation. Weird English revives the aesthetic experiential potential of English; we see through the eyes of foreign speakers and hear through their transcriptions of English a different way of reproducing meaning. (Ch'ien)

[訳：奇妙な英語は外国語という余剰の側面を有する故、理解には解釈に加えて翻訳も必要となる。奇妙な英語は英語の美的かつ経験に基づく可能性を再活性化する。それは私達が外国語としての英語話者の眼差しや英語表記法を通して、意味を生み出す別の方法を目にし、耳にするからである。]

施東來 (Flair Donglai Shi) が論じるように、郭は *Dictionary for Lovers* でこうした「奇妙な英語」を操る作家の一人であるといえる (Shi 26)。郭自身、*Dictionary for Lovers* での英語に関する実験的試みに関して、「作家が実験し、新しい形式を生み出そうとするのにはかなりの困難を伴う。二度と出版してもらえなくなる危険があるからだ It's quite difficult for an author to try to be experimental, try to invent a new form. The risk is you're never going to be published」と発言しているとおり (Guo “Author Learns English,” 3'54-4'02)、以降の作品では *Dictionary for Lovers* ほど大胆な「奇妙な英語」を含んだ作品は発表してはいない。それでも英語で執筆した著作の中に中国語の単語や表現をちりばめたり、中国の古典（あるいはその翻訳）を引用したりすることを積極的におこなうなど、英語を主体にしつつ中国語とのハイブリッドな作品を執筆し続けている。Z は英語で日記をつける時「もう一人の小さな自分がほかの言語で自身を表現しようとしているのを感じる I see other little me try expressing me in other language」(38) と述べているが、郭が執筆において英語の中に中国語を挿入するのは Z の発言の如く「もう一人の小さな自分」という、英語の中に自身の文化的ルーツを書きこむアイデンティティ形成なのであろう。

3.3 主人公 Z の人物像

作品の分析を通じて、これまで挙げてきた以外に主人公 Z のどのような人物像が浮かび上がってくるだろうか。ここでは議論と関連して主に二つの特徴を追加したい。まず第一に、Z は自分を「醜い ugly」と形容しているように自分の容姿に自信がなく、加えて言語理解が不十分な西洋では言語的にも劣等感を抱いている (186)¹³。元々この表現は Z が幼少時から母親に言われてきたものであり、Z の自我形成

¹³ Z は作中で数度自身のことを「醜い農民の娘 ugly peasant girl」や「醜いグローバルな農民 ugly global peasant」などとも形容している (e.g. 60)。global peasant という言葉の組み合わせに見られるコスモポリ

には抑圧的な母親の存在が大きく関わってきたことがうかがえる。

My mother had very bad temper. Maybe she hated me because I was an useless girl. She cannot have the second children because we have one child policy. Maybe that's why she beat me up. For her disappointment. Life to her was unfair too. She was beaten up by her mother for marring my father. She was deprive everything which belonged to her since she married him. (128)

〔訳：母はとても機嫌が悪い人でした。たぶん私が役立たずだから嫌っていたのでしょうか。中国には一人っ子政策があったから、母は二人目の子供を作ることができなかったのです。たぶんそれで私のことを殴っていたのでしょうか。失望ゆえに。母自身の人生もフェアなものではありませんでした。私の父と結婚したことが原因で、母も自分の母に殴られたんです。母は父と結婚してから、それまで自分の物だったすべてを失いました。〕

母からの罵倒や抑圧、虐待を受けてきたため、Z は母を嫌悪すると同時に自己評価が低い人物になった。前述のように Z のイギリス留学は母親も含む両親によって強制された参加であり、Z が自発的にイギリス留学を望んだのではない。とすれば、一年後に留学を終えてイギリスから帰国した際、Z が母親の警告を無視して故郷を離れて北京での一人暮らしを決意したことは、Z がヨーロッパ諸国の異文化に触れて世界に関する知見が広がっただけでなく、Z の成長には母親からの自立というパーソナルな成長も同時に起こったことになる。

I call my mother. I tell her I have decided to leave my hometown job and move to Beijing. She is desperate. Sometimes I wish I could kill her. Her power control, for ever, is just like this country. (350)

〔訳：母に電話した。そして故郷での仕事を辞めて北京で暮らすことにしたと告げた。母は狼狽していた。時々母を殺したくなることがある。母の支配力の強さといったら、いつだってこの国のようなのだ。〕

この場面で Z が母親が自分に対して振りかざしてきた権力を中国の国家権力に喩えているのは示唆的である。留学以前から Z は中国という国家を信じておらず、「『信頼』という言葉は私の辞書にはなかった I even don't have concept of "trust" at all」とさえ発言する (128)。にもかかわらず Z は『毛沢東語録』を度々話の引き合いに出すなど、幼少時から染みついた教育が Z の思考の拠り所の一つとなってきた。母親が自分に貼った「醜い」というレッテルも同様に、長年 Z の自身に対する見方を形成する大きな要素であった。留学を経た Z のグローバルマインドは、国家という公的な抑圧機関と母親というきわめて私的な抑圧者という、公私両方の抑圧からの解放を意味しているといえる。さらに言えば、上記 128 頁からの引用にあるように母親が Z を嫌悪したのは中国の一人っ子政策が理由と Z が推測しているように、中国における公私は切り離されたものではなく、むしろ国家の統制が私生活にまで深く入り込んでいるとの見方もできる。

タニズム的であると同時に、自分の出自と結びついたローカル・アイデンティティも重視する二面性は、郭自身がしばしば自身のアイデンティティとして用いる言葉そのままである。

第二に、Z は必ずと言ってよいほど普段から辞書を持ち歩く。特に留学当初は辞書を「正確 precisely」(11)や「一番大事 most important」(10)と呼び、辞書を学びの拠り所とすることで、英語やイギリス文化を理解し、それが自らの成長の助けになると信じている。辞書への信頼は、Z は中国から持参した『コンサイス中英辞典』の表紙の色が赤いこともあり、『毛沢東語録』とも比較するほどである。アナリサ・オーボエ (Annalisa Oboe) の指摘のように、Z の辞書への信頼と依存は、幼少時から Z がその教えを叩き込まれてきた『毛沢東語録』への信頼と依存と同等のものであり、事実 Z はイギリス文化を理解もしくは疑問視するための手がかりとして、中国の共産主義との比較を繰り返しおこなう (Oboe 270)。Z は「あなた」と話す際に、口癖のように「中国では～」や「中国語では～」と自論を展開する。Z の思考の拠り所はこれまでの中国での生活や文化、体験、そして馴染みのある『毛沢東語録』に書かれている内容であり、ウェン=ディン・フアン (Wen-Ding Huang) らが指摘する通り、イギリスを中国、そして英語を中国語との比較で理解しようとする傾向がうかがえる (Huang et al 47)。その上で、温州の集合住宅での自身の暮らしを引き合いに出しつつ、中国での《プライベートの無さ》《集団主義》《未来志向》《孤独を感じたことはない》などを挙げるなど、イギリスを批判的に眺める (141)。言うなれば Z の思考には二つの文化を二項対立的にとらえようとする傾向が見られ、さらにはイギリスを《西洋》という言葉で安易に置き換えるなどの過度の一般化、還元主義もしくは本質主義的特徴があり、時折鋭い意見や見解を提示するものの、全体として物事の複雑さを受け入れた上での思考を展開する知的さは少なくとも初期の Z には見てとることができない。

3.4 イギリスにおける Z の疎外感や違和感

これまでの議論の中ですでに、イギリスでの文化や言語の違いによる Z の戸惑いや恋人との価値観の不一致について部分的にふれてきた。ここでは、Z がイギリスでの生活で感じた疎外感や違和感が作中で具体的にどのように描かれているのかをまとめた意味も含めて確認していくことにする。Z の孤独や疎外感、人と人との相互不理解や文化間の衝突そして意思疎通の困難さが、関係の断片となって表れていることを理解する。

ロンドンにやって来た当初の Z が異国の地で感じる恐怖や疎外感といった感情は、初めての留学体験と自身の語学力に対する自信の無さ、そしてイギリスに知り合いや友人、家族がいないという事実から生じる不安によるものであった。それは中国でこれまで両親と一緒に暮らす生活が Z にとって当たり前となっており、馴染みのある生活・よく知った文化や環境から放り出されたことによる恐怖でもあったと言い換えることができる。例えばヒースロー空港から出てきたばかりの Z は、西洋に関する自分の知識が中国で放送されていたアメリカのテレビドラマの内容や、ビザ取得の際に北京のイギリス大使館のカウンターで目にした西洋人しかないと語った上で、「西洋には暮らさない。西洋にはホームがない。怖いです。英語が話せません I not having life in West. I not having home in West. I scared. I no speaking English」と不安を露わにする (5)。さらには、居場所のない自分を周囲から切り離された存在とさえ感じ、「幽霊のようにさ迷い歩く walking around like a ghost」(14)や「誰の目にも映らない幽霊みたいに like invisible ghost」(38)と自らを幽霊に喩えて心境を述べる。

元々友達作りが苦手な Z は、「あなた」と会おうまでは語学学校も含めて話し相手がない日々が続く。最初の一週間のホテル暮らしを終えて移った下宿では広東系の大家一家との暮らしが「あなた」と会おうまで続くが、不幸なことに、大家の親世代は Z には理解できない広東語しか話せず、英語を第一言

語として話す子供世代とはそもそも交流がない。孤独と暇を紛らわせるため、Zは連日サウス・ケンジントン映画館に通う。Zが「あなた」と出会ったのはまさにこの映画館であり、以降のZが「あなた」の中に求めたのはイギリスに自分の「ホーム」を持つこと、つまり精神的支柱の獲得であったというのは想像に難くない。

当初は「あなた」との性行為を身体的・精神的両方の意味での一体感と結び付けていたZだが、前述の通り次第に二人の間の価値観の相違が明らかになっていく。そして恋人に「ホーム」という拠り所を求めることの困難さを痛感し、強い孤独を感じる。加えて、Zが依然として自身の語学力への不安も抱えていることも見てとれる。

I don't have a family here, and I don't have a house or a job here, and I don't have anything familiar here, and I only can speak low English here.

I think the loneliness in this country is something very solid, very heavy. It is touchable and reachable, easily. (156)

〔訳：ここには家族はいないし、家もないし、仕事もないし、馴染みある物は何一つないし、下手な英語しか話せない。〕

思うに、この国では孤独というものは何かとっても硬くて重いもの。簡単にさわられるし、手に取ることができるもの。〕

ここではまだZは敢えて「ホーム (home)」という言葉は用いず、「家族」や「家」、「馴染みある物」といった言葉で置き換えているが、もしかしたらそれはイギリスには自分のホームが無いと認めてしまったら、異国の地での一切の希望や居場所を失ってしまうことを理解することになる恐怖からなのであろう。事実、Zは別の箇所「ホーム」と「ハウス」の違い、そして中国語の「家」が両者を含んだ多義性を持つ単語であることに言及し、ホームは心理的アタッチメントを含意し、「自分にはホームが必要である I keep telling you I need a home」と述べている (125-26)。さらには、ヨーロッパ旅行中にZはイギリスへのホームシックにかかり、「あなた」こそが自分のホームだと心境を吐露する。

しかし、「あなた」は「西洋では僕達は孤独に慣れているんだ In the West we are used to loneliness」と切り捨て、Zの心情を理解することはない (222)。「あなた」によるZへの理解や同情の欠如は互いの関係が共通項を持たず、まさに断片化していることを裏付けるものであるが、価値観の違いには他にも、プライバシーの存在の有無 (106) や男女が勘定や家賃を折半することを当然と考えるか (173-75) など、Zが中国の故郷で身につけた価値観と「あなた」の価値観が合わないことが頻繁に生じ、ときに言い争いにさえ発展する¹⁴。

¹⁴ Zと「あなた」が分かり合えないもう一つの要因として、スネイジャ・ガニュー(Sneja Gunew)が指摘するように西洋の中国文化に対する無関心もまた文化の分断の一因として描かれている (Gunew 193-94)。例えばZが「気」の説明をした際に「あなた」はZの知識に驚き、どうして話してくれなかったのだと問いかける。この発言に対してZは「私の文化に関心を抱いたことなんてなかったじゃない You never really pay attention to my culture」と「あなた」を非難する (289)。西洋の中国の文化や芸術に対する無関心については郭自身もインタビューで指摘しているが、ただしそこでは郭は西洋による一方的な無関心ではなく、双方に互いへの理解の浅さがある (I don't think it's the West's fault. There is very little in-

Zの孤独や不安、恐怖はやがて苛立ちとなり、これまで多くの研究者が取り上げ論じてきた、中国語だけで書かれた文章と「編集者」なる者によるその英訳が作中に突如出現する。

我们为什么要学习语言？我们为什么要强迫自己与他人交流？如果交流的过程是如此痛苦？(179)

Why do we have to study languages? Why do we have to force ourselves to communicate with people? Why is the process of communication so troubled and so painful? (180)

[訳：なんで言葉を勉強しないとダメなの？なんで無理してまで人とコミュニケーションをとらないとダメなの？どうしてコミュニケーションをとることって、こんなにもやっかいで辛いのか？]

英語で書くことを放棄した一節は象徴的である。Zは自身のイギリスでの居場所作りのため、将来の成功のために英語を熱心に学ぶ。そのZが自分とは異なる母語を話す人々とのコミュニケーションの意義自体を疑うということは、「言語と文化」(Guo 2017, 259)に対する奮闘を描くことが主題の一つと著者郭が語る本作では、Z自身の行動の根本を疑うことを意味する。人々がコミュニケーションをとることを止めれば、それは即ち世界の断片化に繋がるのだ。

コミュニケーションが生み出す苛立ちを感じてやまないZが、自分だけの言語世界に憧れる一節が作中に登場する。「あなた」とロンドンのカフェにいた際、隣の席にいた男性が置いていった新聞の見出しがZの目に留まる。見出しには「言葉を失う：絶滅危惧種の言語 LOST FOR WORDS—THE LANGUAGE OF AN ENDANGERED SPECIES」と書かれており、最後の使用者である九十八歳の中国人女性が亡くなったことで使用者がいなくなった言語「女書 Nushu」に関する内容になっている¹⁵。女書は「四百年の歴

depth understanding in culture and arts between the West and China) と語る (Guo 2014)。

参考として、カイル・グレイソン (Kyle Grayson) は『くまのパディントン』シリーズに関する論文の中で、ブラウン一家はパディントンの文化を学ぼうとしていないと指摘している。

Paddington is at least bilingual while the Browns are unilingual. Moreover, while Paddington does his best to communicate in English, the Browns make no effort to learn his own first language. (Grayson 386)

[訳：パディントンは少なくともバイリンガルであるのに対して、ブラウン一家は英語しか話せない。さらに、パディントンは英語での意思疎通に努めているのに対して、ブラウン一家はパディントンの第一言語を学ぼうともしない。]

Dictionary for Lovers も『くまのパディントン』シリーズもどちらも移民文学作品という点で、西洋の驕りが見て取れるこの類似点は興味深い。さらには映画『パディントン』では、ブラウン夫妻の娘ジュリーが中国語やクマ語さえも学んでおり、翻案は多様性やグローバル化を反映しているとの指摘が可能であろう。

¹⁵ 女書最後の使用者が九十八歳で亡くなったことに関する記事は実話として『オブザーバー』紙などに見出すことができる。『オブザーバー』紙の記事は、イアン・フアンイ (Yang Huanyi) という名前の女書最後の使用者といわれる女性が同紙発行の前週に九十八歳で死亡したことを報じている (“World in Brief: [1] Language Dies with Woman,” 23: ただし翌年の『ガーディアン』紙に掲載された記事では、女性名は Yang Hunagyi と表記に一部変更があり、年齢も九十二歳と書かれている [Watts])。おそらく郭は『オブザーバー』紙の同記事もしくは別紙に掲載された同内容の記事を基に小説の場面を執筆したと考えられる。先述の通り *Dictionary for Lovers* は郭が渡英初期に書いていた日記を基にしているが、同記事は 2004 年 9 月 26 日付の新聞に掲載されており、これは Z の留学期間 (2002 年 2 月からの一年) とは時

史を持ち、中国の女性が自らの心の奥に秘めた感情を表現するために用いる秘伝の言葉 *four-hundred-year-old secret language being used by Chinese womans to express theys innermost feeling* (121-22) と説明される。記事を読んだ Z は自分だけが理解できる（さらには女性のみが使用者である）言葉に対する憧れを語る。

I want create my own “Nushu”. Maybe this notebook which I use for putting new English vocabularies is a “Nushu”. Then I have my own *privacy*. You know my body, my everyday’s life, but you not know my “Nushu”. (122: イタリックは原文通り)

〔訳：私だけの「女書」を作りたい。新しい英単語を書き入れているこのノートはたぶん「女書」みたいなものなんだ。そうしたら、わたしにも《プライバシー》ができる。あなたは私の体を知っているし、私の毎日の生活も知っている。でも私の「女書」は知らない。〕

この発言は Z の綴る辞書形式の日記が言語やコミュニケーションの問題と結びついて Z に理解されていることを示唆する。Z は異文化との接触や不慣れな言語の使用から生じる苛立ちに悪戦苦闘するのに加えて、「あなた」との関係が必ずしもうまくいかない。その中で、Z が言語が作り出す辞書という世界がイギリスにおいて自分の居場所を見出そうとした場所となり、言語による世界認識を通じての自己安定化の方法となっているのである。

Dictionary for Lovers における世界の断片化は、異文化間の人間関係や言語の問題にとどまらず、国境管理という制度の問題とも関連する。例えば、ヨーロッパ各地を旅行中の Z がアイルランドのダブリンに立ち寄る場面があるが、その際空港の入国管理でビザ未所持ということで仮入国の書類を書かされる (256)。Z はシェンゲン協定加盟国に滞在するビザは得ていたが、アイルランドが加盟国ではないことを知らずに入国しようとしたためである。この逸話を通じて、中国籍を持つ Z にとって国境を越えた移動には制限があるという事実が改めて浮き彫りになる。また別の例では、Z は「最近《私は世界市民になりたい》という表現を学んだが、私にとってはそれは《もっと便利なパスポートを所持できたなら、世界市民になれるのになあ》という仮定法の話でしかない‘I want to be a citizen of the world.’ Recently I learned to say this. I *would* become a citizen of the world, if I have a more useful passport」と嘆く (187:イタリックは原文通り)。中国に帰国後の Z は「あなた」との記憶が今の自分を作ってくれたと発言しつつも、同時にグローバル化の時代において地理的に、国境を隔てて離れ離れとなった互いの間の距離を意識せずにはいられない。

I understand, deeply, in my bones: we are indeed separated. People say nowadays there are no more boundaries between nations. Really? The boundary between you and me is so broad, so high. (349-50)

〔訳：心で理解できる。私達は本当に別れたんだって。最近国と国との間はボーダーレスって言うけれど、本当かしら？あなたと私の間のボーダーはこんなにも広く、こんなにも高い。〕

3.5 主体性維持のためのパーソナルな辞書作成

期的に一致しない。この指摘および女書に関する情報は獨協大学の松岡格氏から頂いた。この場を借りて御礼申し上げたい。

Dictionary for Lovers は、主人公 Z が中国から持参した『コンサイス中英辞典』やロンドンで購入する『コリンズ英英辞典』といった既刊の辞書を頻繁に引きながら英語とイギリス文化を学んでいく過程を描いている。その一方で Z は既存の辞書に終始頼るのではなく、イギリスにやってきて最初の一か月のうちに「毎日新しく学んだ言葉を書き留めて、自分だけの辞書を作っていきたい I want write these newly learned words everyday, make my own dictionary」と自分だけの辞書を作る決意をする(20)。Z は既存の辞書が充足感を与えてはくれないことに気づくようになる。何故なら言語や文化間の相違は辞書の題名にある「コンサイス」という言葉とは反対に、けっして「簡潔 **concise**」ではないからである。Z が語る「自分だけの辞書」は具体的には彼女が毎晩綴る辞書形式の日記を指し、私達 *Dictionary for Lovers* の読者はその日記を読むという体裁で小説を読み進めることになるというのは前述の通りである。ここでは、Z による自分だけの辞書であるパーソナルな辞書作成が、異文化における Z の主体性の維持に繋がっており、さらにはそれが Z 自身の世界認識の有り様も示していることを論じていく。

ロンドンの語学学校での授業が始まってからも、Z は依然としてイギリスでの生活や文化に不慣れな上に語学学校の友人も出来ず、孤独な日々を送る。Z は、異文化に置かれた自分はその地に根を張るような歴史的、文化的結びつきの欠落を痛感すると語る。

This country to me, this new world. I not having past in this country. No memory being builded here so far, no sadness or happiness so far, only information, hundreds and thousands of information, which confuse me everyday. (38)

[訳：私にとってこの国は、新しい世界。私はこの国では過去を持たない。まだ記憶もなければ、悲しみも喜びも出来上がってない。あるのはただ情報だけ。とてもたくさんの情報に、毎日私は戸惑う。]

それ故イギリス人の恋人ができると、頻繁に「あなた」をイギリス文化や英語に関する質問攻めにし、さらには自分にとってのイギリスでの「ホーム」とみなす。こうした「あなた」への依存がある一方で（それは文化や言語の先生としての依存であり、肉体および精神的な一体感を持つことで得られる快感や居心地の良さでもある）、Z は「日々自分を混乱させる無数の情報 **hundreds and thousands of information, which confuse me everyday**」を理解するための対処法として、「毎晩日記をつける **Every night, when I write diary**」(38)。

「あなた」との関係と日記をつけることは互いに関連し、Z はパーソナルな辞書作成を通じて「あなた」への理解の深まりさえ感じる。Z は「あなた」の話す言葉を毎晩日記に書き留め、見返すことで、「あなた」の思考に入り入りこむ感覚を覚える。

Every sentence you said, I put into my own dictionary. [...] I am entering your brain, Although my world so far away from your, I think I be able to understand you. (73)

[訳：あなたが話した言葉を全部、私だけの辞書に書きこむ。〔中略〕あなたの頭の中に入っていく自分がある。私とあなたの世界はこんなにも離れているけれど、あなたの考えが分かるような気持ちになる。]

Zのこの発言で重要な点は二つあり、一つはZは「あなた」との間に異文化や人同士の関係の断片化を認めている点がある。もう一つは、パーソナルな辞書作成はZによる「あなた」そして異文化理解の方法となっているという点である。ここで思い出されるのは、*Radical*の中で郭が、バルトやゴダールらそれまで何度も引き合いに出してきた知識人や芸術家に加えて、カール・フォン・リンネ (Carl von Linné) の分類学に度々言及していることであろう。リンネへの関心を綴った箇所を読むと、郭は世界認識の方法として、情報や意見の独自の分類・整理のための辞書作りを思い描いていたことがうかがえる。*Radical*の中で辞書作りについて郭が最初に言及するのはフェミニズムの文脈であり、その中で郭は過去から乖離することなく、しかし「フェミニズムや政治の厳格な言葉 the rigid vocabulary of feminism and politics」に依存することなく自分が何者かを描くには、プライベートな辞書が必要になってくると語る (Guo *Radical*, 29-30)。つづいて郭は「私の言葉が単なる言葉であったことはない。私の言葉は私自身の極めて身体的な存在なのだ。私の現実を映した辞書なのだ My words are never just words. They are my very physical presence. They are the lexicon of my realities」(Guo *Radical*, 90)と述べ、自身にとってパーソナルな辞書作成、そし敷衍すれば執筆活動は世界認識の方法であると定義する¹⁶。

Zがイギリスに一年間留学した時期は、郭自身が渡英した2002年と自伝的共通性を見出すことができるが、イーファン・ジン (Yifan Jin) によれば、2002年は北京での2008年オリンピック開催が決定したことや中国が世界貿易機構 (WTO) に加盟したことが引き金となり、中国で「英語熱」が高まりを見せた時期ともほぼ一致する (Jin 2)。こうした時代背景を受けて、靴製造業で一財産を築いたZの両親はグローバル化の時代において海外との取引や事業拡大を目論み、そしてZが将来自分達の家業を継ぐのに役立つことを予見してZを英語学習のためにイギリスに留学させることになる。またオーボエは、Zにとって『コンサイス中英辞典』が母語と外国語の言語間の直接的な対応関係を構築してくれるシステムだと信頼を寄せているとも論じる。

For her, the Dictionary is an indispensable tool of communication, which she believes may offer a steady system of correspondences between different yet comparable languages and between word and referent; a system that makes of translation a straightforward process of substitution. (Oboe 270)

[訳：Zにとって辞書はコミュニケーションのための必須アイテムであり、それが、異なるが比較可能な言語同士の、あるいは単語や指示対象同士の明確な対応関係を説明してくれるだろうと信じている。翻訳を一対一対応の代替プロセスにするような対応関係を。]

Zはしばしばイギリス文化が自身が育った中国での文化や生活習慣、思考、中国語の文法と大きく異なる

¹⁶ 加えて郭は *Radical*の中で辞書や辞典に関してボルヘスやフーコーなども引き合いに出している (Guo *Radical*, 71-75)。もっとも、郭はパーソナルな辞書作成が言語や文化といったそれまで築き上げられてきた遺産の重みを背負った上での行為であることも十分認識している。

How can I quote other dictionaries, when I'm trying to create my own? With languages and cultures, I am under a vast weight that precedes me. It's a burden on my own words. (Guo *Radical*, 180)

[訳：ほかの辞書を引用するにはどうしたらよいのだろう、自分自身の辞書を作ろうとしている時に。言葉や文化と、私よりも前から存在するものの圧倒的な重みを感じる。その重みは私自身の言葉への負担となる。]

時、「何故? どうして?」と疑問を投げかけることで、英語や異文化を安易に受け入れるのではなく、別の視点から眺めることを読者に促し、英語やイギリス文化の主体性を揺さぶる。Zが自論を展開する英語と中国語の比較の例として、中国語には過去形などの時制による変化や相などはないが英語にはあること、英語は《I》や《you》など人で文を始めるが中国語は天気などで文を始めること、《agnostic》という言葉が『コンサイス中英辞典』に載っていないことについて「この単語は中国人には重要ではないのかも Maybe this is the word not important to Chinese」などと語る(190)。こうした疑問に学術的な根拠はなく、一時的なその場限りの面白さはあるが、ときにZの知性の無さや考察の浅さを示してさえいる。実際、Zも時間や場所に関する言葉で文を始めていることはあり、物主語も用いている。また、そもそも辞書に載せる単語や表現がZが考えるような論理や理由で選ばれることはなく、あくまでZの思い付きではある。

このようにZが投げかける疑問はときに英語初級者としてのナイーブな問いかけであるものの、こうした意見の積み重ねがZの日記兼辞書作成を支える重要な一つのルールになっていることを見逃してはならない。前述のように同小説では各セクションのタイトルに英単語が一つ選ばれ、直後に辞書的定義が掲載されているが、各セクションの中心は辞書的定義ではなく、単語に関連したZの個人的体験談とZによる異文化や英語に関する自己流の解釈である。小説の題名にもなっている *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers* という「辞書」は、Zが試みた自己流の世界認識の痕跡であり、彼女なりの情報整理の場というわけである¹⁷。その意味でオーボエの以下の指摘は正しい。

Z does not 'learn' English, but recreates the language anew, so that the actual process of learning a foreign idiom is remolded by her imaginative engagement with the opaqueness of language and the slipperiness of signs. (Oboe 274)¹⁸

〔訳：Zは英語を「学ぶ」のではなく、新しく英語を再創造する。外国語の慣用表現を学ぶという実際の過程は、言語の持つ不透明さや記号の曖昧さに対してZが想像的に取り組むことで新しい型を与えられるのだ。〕

加えて重要な点として、体験や言語に関する日々の問いかけを通じてZは他者に同化されることのない自身の声と視点を獲得し、主体性を維持することになる。オーボエは「あなた」との恋愛・身体的解放が、言語学習を「問題を抱えながらも、自己の確立と解放に結びつける turns language-learning into a love-like process which, though problematic, allows for self-construction and freedom」とも述べる(Oboe 273)。Zはイギリス社会において留学生としてのマイノリティである自分の立場を痛感し、常に孤独や疎外感を感じる。しかし自身が身を置く異文化に疑問を投げかけ続け、他者化し、自分の方法で世界を理解しようと試

¹⁷ パーソナルな辞書作成がZにとっての不可解な体験に一定のまとまりを与えることに加えて、たとえばプーンは、同小説内に広告や日記などの様々な資料が挿入されていることが「断片の寄せ集まり melange of fragments」に「共通の意味を与える試み seeks to construct coherent meaning」と理解できると述べている(Poon 2)。

¹⁸ ユング・フワン(Eung Hwang)も同様の指摘をしている。

[H]er personal dictionary that she writes becomes her guide and her only map for living in what she feels is an incomprehensible country with an impossible language to learn. (Hwang 80)

〔訳：Zがつけているパーソナルな辞書は、学び難い言語が話されている不可解な国と感じられる土地で暮らすためのZにとって案内人となり、唯一の地図になる。〕

みることで、自身が周縁化もしくはマジョリティに同化吸収されること拒む。ただそれは同時に、異文化であるイギリスへの共感や「あなた」との相互理解を困難にし、イギリスでの孤独を深める諸刃の剣にもなっている。言語習得が多文化主義的の包摂に繋がると考えがちな私達にとって、Z は言語学習を逆手にとって逆に文化や人同士の差異を強調する。

Z には自分の体験を《西洋と中国の違い》あるいは《英語と中国語の相違点》のように一般化する傾向が見てとれる。とはいえ、「あなた」という一個人との交流の例だけをもって、イギリス（あるいは西洋）と中国を対比した比較文化論を展開することはそもそも不可能である。私達は *Dictionary for Lovers* を一個人と一個人の出会いの物語、グローバル化の時代におけるある一つの出会い方として理解するべきなのだろう。そう理解することで、自分にとって馴染みのある中国での生活をベースに外国語や異文化を必死に理解し、ときに不満を述べようとする Z の姿勢や世界の捉え方が明らかになってくる。換言すれば、*Dictionary for Lovers* は知識人同士の出会いなどの特定の特権的立場にある人々の異文化交流を描いているのではなく、多くの「一般人」にとってのグローバル化の一例を示していることになる。Z の世界認識の奮闘がもっとも顕著に表れているのが、これまで度々ふれてきたとおりのパーソナルな辞書作成になる。辞書は世界の断片的な情報を分類・編纂し、一つの整合性と理解の方法を与えてくれる。それはアレックス・ティケル (Alex Tickell) が指摘するように、Z のパーソナルな辞書には既存の辞書的定義と比較して「より柔軟性があり、それ故第二言語による奇抜な介入として、英語やイギリス文化の様々な事柄に対して Z を対応可能にしてくれる more fluid, allowing Zhuang to respond to aspects of English language and culture as idiosyncratic interventions in a second language」からである (79)。安定や定住、馴染みのある慣習を好む Z にとって、パーソナルな辞書作成は「あなた」への依存と並んで異国イギリスでの孤独や不安を打ち消す心の拠り所の一つとなる。しかしながら皮肉にも、パーソナルな辞書作成、つまり世界の分類・編纂を通じて Z が最終的に知るのとは、自分が頼りにしている『コンサイス中英辞典』やコリンズの辞書といった規範の辞書は辞書的定義と現実の体験との差しか教えてくれず、しかも世界は簡潔に理解できるよりもはるかに複雑に成り立っていることである。

事実、「あなた」との交際が進むにつれて二人の価値観の違いが浮き彫りになっていく。それは郭が影響を受けてきたバルトの著書『恋愛のディスクール：断章』という題名が予め暗示していたかのように、Z と「あなた」の恋愛関係には越えられない壁が存在し、二人の存在は一つになれずに断片として漂う。Z にとっての漂流とは中国とイギリス、あるいはヨーロッパ各地の国境を跨いだグローバルな移動に加えて、イギリス社会で精神的拠り所を得られない異文化の中での「幽霊のような」感覚であり、「あなた」にとっての漂流は若いころの世界中を旅した放浪であり、そして現在のロンドンという大都市の生活に疲弊しては田舎で生気を養う、田舎と都会の間の移動でもある。

Z が「あなた」との距離を感じる原因の一部はたしかに言葉の問題である。例えば、「あなた」がイギリスの友人と会話しているときに、Z には話の内容、とくに冗談が分からず言葉の壁を感じる (265-66)。しかし二人の間のすれ違いは言葉の問題とはかぎらない。二人の間に距離を作る原因は根本的には文化の差として描かれている。この場面では確かに Z は言葉の壁を感じるが、「あなた」の友人が帰った後に Z が「あなた」に対して「自分がこの場にはいないように感じる。あなたとはもう一つになれないのね I am detached. We are not one body anymore」 (268) という時、それは Z がヨーロッパ旅行を終えてロンドンに戻って来ることが分かっていたまさにその日に「あなた」が友人を家に呼び、Z とのしばらくぶりの

時間を二人きりで過ごすという選択をしなかったことに Z が価値観の違いを感じたからである。「あなた」は自分にも私生活というものがあると語り、Z に向かって「それはちょっと自分勝手なんじゃないか I think you are being a bit selfish」と責める (268)。中国での家族生活や集合住宅での集団生活に長年慣れてきた Z はプライバシーの大切さや自己優先の姿勢を理解できず、「雨が多いこの古い、資本主義の国では《自分が一番大事》なんだ in this rainy old capitalism country, “self means everything”」(270) と批判し、それが芸術、ビジネス、ファッション、社会制度とあらゆるものに深く根ざしていると結論付ける。

また、「あなた」に結婚の意志があるかと問いかけた際、Z は将来を思い描いて計画を立てることの重要性を説く。その際「あなた」は「いつも将来のことを心配しているね。〔中略〕僕の生き方を認めないし、僕のことを変えられないんだと納得できないのなら、一緒になんてなれやしない You're always worried about the future. [...] We can't be together if you don't accept my life style and realise you can't change me」と言う (300)。「あなた」が突き付けた言葉には、Z に多様性を認めることとそれが出来なければ二人の関係は断片的な者同士の関係に留まることを告げている。一方 Z は自分が未来を見据えて生きる人 (live for the moment)、「あなた」は今を生きる人 (live in the moment) と二項対立的に分類する。そして英語と中国語の時制の有無の話まで引き合いに出し、二人の価値観が文化の差異に根差したものであると主張する。Z によれば、中国語の動詞「愛」は英語の love に相当するが、中国語には過去形などの時制の変化はないため、中国語における「愛は過去も未来も含んだ存在 Love is existence, holding past and future」と語り、中国語であれば二人の愛は永遠なのだがとつぶやく (301)。しかし何よりも皮肉が効いているのは、Z は中国に帰国後、母親との電話で故郷での公務員の安定した職を辞し、作家を夢見て北京で一人暮らしをする意向を伝えた際、「あんたは将来のことを考えたことなんて無いんだから You never think of the future」と言われる (353)。Z 自身の理解と現実との差については、レイチェル・ギルモア (Rachael Gilmour) も指摘する通り、Z は言語的に中国には「未来時制」がないことを繰り返し述べているが、現実で未来のことを考えられないと言っているのは恋人の方である (Gilmour 219)。いうなれば、Z の考える《中国＝未来志向》対《「あなた」もしくは西洋＝今を生きることに価値を置く》という二項対立的図式ほど世界は単純ではない事実が浮かび上がってくるのだ。「あなた」は別れを選択した際 Z に向けて、「少なくともきみはまだ多くのことを学んでいる最中だ。たとえすべてが壊れてしまっているでも AT LEAST YOU'RE STILL LEARNING A LOT, EVEN IF EVERYTHING IS BROKEN」と吐き捨てる (338: 大文字は原文の通り)。Z が異文化理解に努めて知見を広げていることを「あなた」が認める一方で、その中で異なる文化背景を持つ恋人同士が互いを理解できずに関係が壊れ、バラバラになっていく様子が示されている。「あなた」の発言は、グローバル化の時代における異文化交流と断片化を如実に示した一言といえるだろう。二人が一つになれない (結婚の意味でも、精神的な結びつきの意味でも) ことは Z も感じとっており、「けっきょくあなたは自分だけの世界を生きる人なのね。そこでは二人の間に大きな溝が存在する Then you live in your own world, the world that has a big gap between us」(302) と述べる。恋人たちが理解し合えない断片同士の寄せ集めである様は、「私は暗闇を見つめる。そして長い夜にいろんな考えを暗闇に向かって話しかける、たった一人で I stare at the darkness I have enough thoughts to talk to the long night, alone」という Z の孤独感にも表れている (303)。

3.6 Z による英語への順応の物語

Z が自らの居場所を構築する過程で情報を分類・整理し、自分の世界を作り上げるといっても、それは

英語の優位性自体を脅かしてはいない。例えばベリンダ・コング (Belinda Kong) が指摘するように、*Dictionary for Lovers* は英語という言語が持つヘゲモニーや暴力性を明らかにする作品ではなく、「中国人移民が徐々に英語文化に吸収されていく、生政治的なしつけの過程を描いているとして解釈できる interpreted as a process of biopolitical discipline, whereby the Chinese migrant gradually gets absorbed into a dominant, proper, and publishable English」のである (Kong 479)。事実、主人公 Z にとって英語の上達が最大の関心事であり、小説の結末に至るにあたって流暢になった英語を駆使して中国帰国後も英語で日記をつけ続けている。さらには、英語上達にともない Z は、イギリスで英語を学んでいた当初頻繁に繰り返していた、無知であった故の興味深い英語に関する質問をする姿勢をいつしか一切やめてしまっている。これらは Z が英語の文法や語法、そしてそれらに象徴される西洋の枠組み・思考の体系を受け入れたことを示しているといえるだろう¹⁹。

中国帰国後に北京に居を構えた Z は、資本主義・市場経済が入り込んだ大都市での生活に自分の居場所の無さを感じる。同時期にかつての恋人「あなた」から届いたウェールズでの田舎暮らしを語った手紙²⁰に中国での生活以上の親近感を Z が覚える姿は、変化を遂げる中国都市部への西洋経済の影響、グローバル経済の波に違和感を感じつつ自身の心の拠り所を農村に求める姿勢であるが、そうした牧歌的なノスタルジアは中国の農村での暮らしではなく、海を越えたウェールズからの手紙で補填される。

I am sitting in a Starbucks café in a brand new shopping centre, a large twenty-two-storey mall with a neon sign in English on its roof: *Oriental Globe*. Everything inside is shining, as if they stole all the lights and jewels from Tiffany's and Harrod's. In the West there is "Nike" and our Chinese factories make "Li Ning", after an Olympic champion. In the West there is "Puma" and we have "Poma". The style and design are exactly the same. The West created "Chanel no. 5" for Marilyn Monroe. For our citizens we make "Chanel no. 6" jasmine perfume. We have everything here, and more. (352: イタリックは原文通り)

〔訳：真新しいショッピングセンター、屋上に英語で《オリエンタル・グローブ》と書かれたネオンサインがある大きな 22 階建てのモールの中にあるスターバックスカフェの席に座っている。中

¹⁹ 作中ではイギリス留学中に Z が西洋の料理を学ぼうとしている場面も登場する (135)。ここでおそらく思い出されるのが、映画『ロスト・イン・トランスレーション *Lost in Translation*』であろう。アメリカの俳優ボブ・ハリソンがウイスキーのコマーシャル撮影のため来日した際、写真家の夫と日本を訪れていたアメリカ人女性と知り合う様子を描いた同作品には、ストリップショーが行われているバーで日本の仕事関係者らと待ち合わせをする場面がある。ショーに嫌悪感を抱いた二人はバーを抜け出す。日本語を話せない二人にとって、日本文化は不可解な存在でありつづける。言語の壁故に滞在先の文化との間に大きな隔たりを感じる二人とは対照的に、Z は在る物は何でも自分の英語学習やイギリス文化理解の教材にしていく。Z はロンドンソーホーののぞき穴やストリップショーの熱心な観客となる。女性の身体性を通じての異文化学習というボディポリティクスは、Z を一方でイギリス現代文化の積極的な参加者/消費者にし、他方でその規範を逸脱した文化の受容方法故に、逆説的にも Z をイギリス文化の部外者/観察者にする。

²⁰ 21 世紀初頭に e メールなどではなく手紙を受け取ったことに関して、オーボエは「あなた」からの手紙を「ゆっくりとした言葉」もしくは「贈り物」として読み、そこにグローバル資本主義における一般化した交換の形式としての商品ではなく、愛の言葉で書かれた「供物」のイメージを見る。オーボエはそれをグローバル化の時代における「地理的距離を越えた人生の共有の基盤 the basis of a vision of shared life across distance」と解釈する (Oboe 278)。

にある物すべてが輝いている。まるでティファニーやハロズから光と宝石を全部盗んできたみたいだ。西洋には「ナイキ」があるけれど、中国の工場では「李寧」を作っている。オリンピックチャンピオンの名前にちなんで。西洋には「プーマ」があるけれど、ここにあるのは「ポーマ」。形とデザインはまったく一緒。西洋はマリリン・モンローのために「シャネルの5番」を作った。中国は、私達市民のために「シャネルの6番」でジャスミンの香水を作る。ここには何でも揃っていて、いやそれ以上の物まである。]

北京のショッピングセンターの名前 (Oriental Globe) が象徴的であるように、Z が目にする北京は中国的なオリエンタルさとグローバルさの両方を持ち合わせ、西洋の人気ブランドや商品の海賊版で溢れている。両者の関係には、都市/農村、西洋/中国、資本主義/共産主義といった小説内で Z がしばしば引き合いに出してきた二項対立が不適切なほどに世界がグローバル化の道を歩んでおり、そして Z を飲み込んでいく様子を読み取ることができる。

3.7 漂うこと、不安を引き受けること

Z のパーソナルな辞書作成の営みは、逆の見方をすればイギリス生活が彼女の目にはじつに混沌と映り、Z が戸惑っていることの証左であり、その混沌を理解可能な範囲で切り取り、分類することで異文化理解に一定の秩序を与える試みと解釈できる。それは、異国の文化の中で拠り所なく漂流する自分自身の不安を解消するために「あなた」の存在と並んで Z が期待した、いわばもやい柱であったとも表現できるだろう。

しかし『恋愛のディスクール』の中でバルトは「愛の断片 fragments of love」は安定にはつながらないと語る。バルトによれば、それは「ある目的 (定住) のために分類されうるものではなく、構成を与えられたり、階層化されたり、纏められるものではない cannot be classified: organized, hierarchized, arranged with a view to an end (a settlement)」 (Barthes 2002, 7-8)。Dictionary for Lovers では Z の目を通して中国と西洋、もしくは中国語と英語が比較されるが、そこに見出される傾向として、両者の歩み寄りや混濁性ではなく文化の差異や分断こそが繰り返し強調されている。「あなた」もまた Z に対して、「不確定さを引き受けて生きていけることが大事 It's important to be able to live with uncertainty」と語り、安定や秩序よりも不安や不確定さこそが現代を生きるカギだと告げる (108)。結果としてイギリスでの留学体験を経て Z が学ぶのは、リー・シノイメリ (Lea Sinoimeri) も指摘する通り、もやい柱なく「漂うこと」への覚悟である。

Zhuang learns that she cannot belong anywhere, anymore, but that 'drifting' and 'floating' between different countries, different worlds and different identities will be her future condition. (Sinoimeri 744)

[訳: Z は自分の居場所がもはやどこにも無いこと、そして、異なる国の間、異なる世界の間、異なるアイデンティティの間を「漂流」および「浮遊」することが自身の将来の姿となることを知る。]

漂うこと (drifting, floating)、つまり漂流 (放浪とも訳すことができる) という言葉は作中に何度も登場し、Dictionary for Lovers 内のキーワードの一つになっている。タイトルがまさに「漂流者 drifter」となっ

ているセクションで Z は「あなた」の日記を盗み読むが、その時、「地に足をつけず漂い続けていられる人などいるだろうか How a person can do for so long without his feet stand on soil?」（94）と考える。日記に書かれていた若い頃の「あなた」は反資本主義者として世界中でデモに参加していた。当時の「あなた」は自身について「常に彷徨っていた *always drifting around*」と供述する（96）。Z がイギリスで安定志向である理由は、前述の通りイギリスにルーツも知り合いも持たない故の根無し草的存在から来る不安の反動なのだが、そもそも Z は「あなた」と正反対に定住や安定を好む性格であることが作中からうかがえる。その一つの例として、英語に関する Z の個人的見解が挙げられる。Z は好きな品詞に副詞や形容詞を挙げ、嫌いな品詞に名詞や動詞を挙げているが、その理由は前者が数や格などで変化しないからである（98）。別の例として、Z にとっての理想の男性像として安定した収入や結婚できるかが重要な要素になっているが（101）、そこには Z が育ってきた文化における保守的考えの影響が色濃く出ている。

Z は安定志向であり、孤独からの解放として母語としての英語話者、男性、母親、『毛沢東語録』、既存の辞書など常に権威に依存しようとしてきた。しかし、ヨーロッパ旅行を経て Z は漂流する態度を身につけていく。Z の心境に大きな変化が訪れるのはヨーロッパ旅行中にアムステルダムで列車を待っている時に起こり、この時初めて自身に対して「漂流者」という言葉を使う。駅で一人寂しく佇んでいる自分を漂流者であると感じ、「浮遊する一握の埃。きっと神様には地上に漂う小さな人間がこう見えているのだろう *A floating dust, that must be how God see a little human drifting on the Earth*」と考える（211）。直後に Z は「強くならなくては *I just need to be strong*」と「あなた」への過度の依存をやめることの必要性を意識する（213）。

「あなた」への依存からの解放は性的関係の文脈でも象徴的に描かれている。「あなた」との肉体関係に快楽を覚える Z は、肉体的かつ精神的な服従を示唆する言葉「私はあなたの植民地 *I'm your colony*」を日記に書き留める（177）。「あなた」への身体的依存は Z がポルトガルのタビラ滞在中に人生で初めて自慰行為をした時に、「自分自身でもできる。できるの。男性に依存することなく、自分自身に頼ればいいんだ *I can be on my own. I can. I can reply on myself, without depending on a man*」という自立への兆しを見出す（245）。さらには「私ばかりが話をし、あなたの言葉を奪っていく *I talk and talk, more and more. I steal your words*」と言語的にも二人の主従関係は次第に逆転していく（293）。

Z はヨーロッパ旅行を通じて、自分以外の人間との一体感や強固な結びつきあるいは依存状態の中で生きるのではなく、世界の断片の一つとして漂い生きることに対する恐怖を受け入れるに至る。Z は「一本の木を失うことを恐れるあまり、森全体を見ないのはよくない *I shouldn't be scared about losing one tree, instead of seeing a whole forest*」と語る（325）。ここでの「一本の木」とは「あなた」を指しており、一個人との別れを恐れることよりも世界全体を理解することの重要性に Z は気づく。Z はグローバル化社会で断片の一つとして漂流し続ける心構えを学んだといえる。

漂流者としての生き方は、Z にとってイギリスでの生活だけでなく中国での生活でも必要となる。何故ならグローバル化の時代においては、西洋と中国は経済的にも文化的にも影響関係にあり、互いを切り離して考えることなどできないからである。ビザの期限延長申請が却下されて1年のビザが切れた Z は、中国帰国後の北京が2008年のオリンピックを控えて資本主義で溢れていることを目の当たりにする。戸惑いを見せる Z は帰国後500日経った時受け取るウェールズからの「あなた」からの最後の手紙に共感するが、それは Z が手紙に国や文化、地域差を越えた一個人同士の心境の共通点を感じ取ったからであ

る。手紙には「あなた」がロンドンでの人々を疲弊させる暮らしをついに捨てて、ウェールズの田舎に移り住んだことが記されている。書き手の住所を見て、Zは移住先の土地がイギリス留学中に二人で訪れたウェールズの田舎であることに気づく。もはや恋人同士ではなく、ましてや地理的に大きく隔てた場所に住む二人の関係は、Z自身が「もはや二人の間にある境界を越えることはない no more crossing over」と述べるように (353)、かつてZが求めた密接な関係とは程遠い断片同士の寄せ集まりの関係となっている。しかしその関係にこそZは喜びを覚え、「いままでで一番のプレゼントだ It is the best gift you ever gave me」と語る (354)。

郭が知的影響を受け、本小説にも題名や構成の点で著作からの影響を十分に見出すことができるバルトは『記号の帝国』の中で、辞書とは中心の無い、断片の寄せ集めであると述べる。同書によれば、「中心を持たない物事の集合の一形態として最も分かりやすいイメージは辞書のそれであり、一つの単語が他の単語によってのみ定義される the clearest image of a form of collection of things without a centre would be that of the dictionary, in which a word can only be defined by other words」(Barthes 1983, 78)。物事が互いの関係性のみで構成される脱中心的な辞書の捉え方はフランスの構造主義（もしくはポスト構造主義）的思想に典型的であるが、Zが異文化や外国語との奮闘の中で世界を認識する手段としてパーソナルな辞書作成による情報の分類・整理をおこなった結果、それがむしろバルトの指摘するような辞書の脱中心的な特徴にたどり着いたというのは一種の皮肉なのであろうか。いや、それはティケルの指摘のとおり、Zの辞書作成に内在する「意味を固定化すると同時に不安定にもする unsettles as much as it consolidates meaning」性質故のことで (Tickell 85)、この結論に至ることは初めから運命づけられていたのだろう。

4. おわりに

小説 *Dictionary for Lovers* では、中国からの留学生Zはパーソナルな辞書作成に取り組むことでイギリス滞在中に感じ続けた孤独や異文化コミュニケーションの困難さ、人と人との価値観の不一致等に起因する断片の寄せ集めとなった (fragmented) 世界に秩序を与えることで、理解可能な安定性を得ようとする。しかし最終的にZが気づかされるのは、グローバル化時代の世界はけっして簡潔 (concise) ではなく、断片の寄せ集めやそれらの複雑な結びつきから成る世界を受け入れることの必要性、世界の漂流者となることへの覚悟である。むしろパーソナルな辞書作成という行為自体は、バルトが描写するように各項目が断片として存在し、それらが相互間の一定のルールや結びつきにより一つの世界を構成しているということを表現しており、郭による現代の世界認識の喩えになっているといえる²¹。

Zなりの世界の分類と情報の整理は、Zが異文化との接触で困惑してバラバラになりそうな自分を繋ぎとめるための居場所を確保する試みであった。と同時に、それはZに世界の複雑さを強く認識させるものでもあった。グローバル化は世界各地を関連付けていくと同時に、ときに国境を越え、ときに国内を農村から都市部へと移動する人々に戸惑いを与え、文化の衝突の中で理解の難しさを痛感させ、慣れ親し

²¹ この認識は郭の独自の捉え方であり、必ずしも現代中国あるいは中国人ディアスポラ研究者の間で共有されているわけではないことは指摘しておきたい。例えば、華僑研究者アイワ・オン (Aihwa Ong) は「柔軟なシティズンシップ flexible citizenship」という言葉を用いて中国系移民にみられる特定の場所への帰属意識に縛られない柔軟性を主張する一方で、アカデミックな文脈において現代中国を語る上で断片化等の「ポストモダン的な」言葉がしばしば用いられ、中国の近年の変化が驚きをもって迎えられ、その根底に未だに中国を変化の無い文化とみなすオリエンタリズム的思考があるからだと批判している (Ong 134-36)。

んだ共同体や文化から乖離した者達を不安にしてい。イギリス留学を振り返った Z は「あなたを自分のたった一つのホームと絶えず思い込み、あなたを失うことを恐れて不安を感じ、あなたを独占し、コントロールしようとした I always believed you are my only home here. I feel so insecure because I am so scared of losing you. That's why I want to control you」と独白する (325)。Z の不安は異文化での生活で移民の多くが抱える不安として響いてくる。同小説は、統合と孤独という二つの相反する側面を持つグローバル化の時代を生きる漂流者達の生き方の一つの有り様を示した現代のアレゴリーといえる。グローバル化の時代における移動と断片化という主題は、同作品以降も郭が著作や映画作品で繰り返し提示している。他の作品の分析はまた別の機会におこないたい。

参考文献

- Barthes, Roland. *Empire of Signs*. Illustrated edition. Translated by Richard Howard. Anchor Books, 1983.
- Barthes, Roland. *A Lover's Discourse: Fragments*. Translated by Richard Howard. Vintage, 2002.
- British Library. "What's On? Exhibition: Chinese and British." 2023. <https://www.bl.uk/events/chinese-and-british>
- Ch'ien, Evelyn Nien-Ming. *Weird English*. Kindle. Harvard UP, 2004.
- Doloughan, Fiona J. *Contemporary Narrative : Textual Production, Multimodality and Multiliteracies*. Bloomsbury Publishing, 2011.
- Gilmour, Rachael. "Living between Languages: The Politics of Translation in Leila Aboulela's *Minaret* and Xiaolu Guo's *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*." *The Journal of Commonwealth Literature*, vol. 47, no. 2, 2012, pp.207-27. DOI: 10.1177/0021989412440433
- Grayson, Kyle. "How to Read Paddington Bear: Liberalism and the Foreign Subject in *A Bear Called Paddington*." *British Journal of Politics & International Relations*, vol. 15, no. 3, 2013, pp.378-93.
- Guo, Xiaolu. *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*. Vintage, 2007.
- Guo, Xiaolu. "Author Learns English While Writing Novel." Interview with Rick Kleffel. *National Public Radio*, 9 Dec. 2007. <https://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=17055686>
- Guo, Xiaolu. "Xiaolu Guo: Why We Pretend That Everyone Is Exceedingly Free Even When They Aren't to Appropriate Status?" Interview with Pamela Cohn. *Guernica*, 30 Jan. 2014. <https://www.guernicamag.com/xiaolu-guo-why-we-pretend-that-everyone-is-exceedingly-free-even-when-they-arent-to-appropriate-status/>
- Guo, Xiaolu. *Once upon a Time in the East: A Story of Growing up*. Kindle. Vintage Digital, 2017.
- Guo, Xiaolu. "Translating Love in the Time of Brexit." Interview with Jaeyeon Yoo. *Electric Literature*, 22 Oct. 2020. <https://electricliterature.com/xiaolu-guo-novel-lovers-discourse/>
- Guo, Xiaolu. *Radical: A Life of My Own*. Chatto & Windus, 2023.
- Guo, Xiaolu. "Xiaolu Guo: 'It Would Be Tacky to Ask: Can You Forgive Me for Writing This?'" Interview with Hephzibah Anderson. *Guardian*, 8 Apr. 2023. <https://www.theguardian.com/books/2023/apr/08/xiaolu-guo-it-would-be-tacky-to-ask-can-you-forgive-me-for-writing-this-radical-a-life-of-my-own>
- Gunew, Sneja. *Framing Marginality: Multicultural Literary Studies*. Melbourne UP, 1994.
- Huang, Wen-Ding, et al. "Occidentalism, Undergraduate Literary Reading, and Critical Intercultural Pedagogy."

- Higher Education Studies*, vol. 12, no. 4, Sept. 2022, pp.45-56. DOI: 10.5539/hes.v12n4p45
- Hwang, Eungu. "Love and Shame: Transcultural Communication and Its Failure in Xiaolu Guo's *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*." *Ariel: A Review of International English Literature*, vol. 43, no. 4, 2013, pp.69-95.
- Jameson, Fredric. "Third-World Literature in the Era of Multinational Capitalism." *Social Text*, no. 15, autumn 1986, pp. 65-88. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/466493>
- Jin, Yifan. "Deterritorializing Hegemonic Globalization Progressively in Xiaolu Guo's Experimental Writing: A Comparative Reading of *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers* and *A Lover's Discourse*." *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, 2023. DOI: 10.1080/00111619.2023.2169102
- Kong, Belinda. "Xiaolu Guo and the Contemporary Chinese Anglophone Novel." *The Oxford Handbook of Modern Chinese Literatures*. Edited by Carlos Rojas and Andrea Bachner. Oxford Handbooks (2016; online edn, Oxford Academic, 1 Sept. 2016). pp. 474-97. DOI: 10.1093/oxfordhb/9780199383313.013.24
- Mbembe, Achille. "Africa and the Future: An Interview with Achille Mbembe." Interview with T. M. Blaser. *Africa Is a Country*, 2013. <http://africasacountry.com/2013/11/africa-and-the-future-an-interview-with-achille-mbembe/>
- Mignolo, Walter D. "The Many Faces of Cosmo-polis: Border Thinking and Critical Cosmopolitanism." *Public Culture*, vol. 12, no. 3, 2000, pp.721-48.
- Oboe, Annalisa. "Language, Eros and Culture in Xiaolu Guo's *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*." *The Tapestry of the Creative Word in Anglophone Literatures*. Edited by Antonella Riem. Forum Editrice Universitaria Udinese, 2013, pp.273-85.
- Ong, Aihwa. "Flexible Citizenship among Chinese Cosmopolitans." *Cosmopolitics: Thinking and Feeling beyond the Nation*. Edited by Pheng Cheah & Bruce Robbins. U of Minnesota P, 1998, pp.134-62.
- Poon, Angelia. "Becoming a Global Subject: Language and the Body in Xiaolu Guo's *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*." *Transnational Literature*, vol. 6, no. 1, Nov. 2013. <http://fhrc.flinders.edu.au/transnational/home.html>
- Prokkola, Eeva-Kaisa. "Unfixing Borderland Identity: Border Performances and Narratives in the Construction of Self." *Journal of Borderlands Studies*, vol.24, no.3, 2009, pp.21-38. DOI: 10.1080/08865655.2009.9695737
- Rahbek, Ulla. "When Z Lost Her Reference: Language, Culture and Identity in Xiaolu Guo's *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*." *Otherness: Essays and Studies*, vol. 3, no. 1, 2012. http://www.otherness.dk/fileadmin/www.othernessandthearts.org/Publications/Journal_Otherness/Otherness_3.1new/Rahbek.pdf
- Shi, Flair Donglai. "Translating the Translational: A Comparative Study of the Taiwanese and Mainland Chinese Translations of Xiaolu Guo's *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*." *Translation and Literature*, vol. 30, 2021, pp.1-29. DOI: 10.3366/tal.2021.0443
- Sinoimeri, Lea. "Beyond the Mother Tongue: Language as Cultural Capital in Xiaolu Guo's *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers*." *Language and Intercultural Communication*, vol. 21, no. 6, 2021, pp.734-48. DOI: 10.1080/14708477.2021.1983582
- Thomas, Susie. "'With Your Tongue Down My Throat': Hanan al-Shaykh's *Only in London* and Xiaolu Guo's *A*

Concise Chinese-English Dictionary for Lovers.” *Literary London: Interdisciplinary Studies in the Representation of London*, vol. 5, no. 2, Sept. 2007. <http://www.literarylondon.org/london-journal/september2007/thomas.html>.

Tickell, Alex. “The Work of Art in the Age of Transnational Reproduction: Form and Intertextuality in Xiaolu Guo’s *A Concise Chinese-English Dictionary for Lovers* and *A Lover’s Discourse*.” *Studies in the Novel*, vol. 55, no. 1, spring 2023, pp.76-92. DOI: 10.1353/sdn.2023.0004

Watts, John. “The Forbidden Tongue.” *Guardian*, 23 Sep. 2005.
<https://www.theguardian.com/world/2005/sep/23/china.gender>

“World in Brief: [1] Language Dies with Woman.” *Observer*, 26 Sep. 2004. p.23.

Zhen, Zhang. “‘I’m a Modern Peasant’: Encountering Xiaolu Guo.” *World Literature Today*, vol. 82, no. 6, 2008, pp. 45-48. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/20621416>

エッセイ等(資料紹介、読書ノート)

2023年夏チェコ再訪記： コロナ、ウクライナ戦争を経て

森下 嘉之

私事で恐縮だが、今夏（2023年8-9月）、コロナ以降初めて欧州チェコ・プラハを訪問した。この間、2022年2月に勃発したロシア・ウクライナ戦争とそれに伴う航空運賃・物価の上昇、円安の影響、デジタル化の進展など、変化の大きさに驚くこと多々であったが、本エッセイでは主にプラハの街で感じた、ロシア・ウクライナ戦争の影響について述べてみたい。

2023年夏、プラハを歩いて目についたことは、街中に掲げられたウクライナ国旗の多さであった。ウクライナにおいては、2014年2月の「ユーロマイダン革命」から同年のロシアによるクリミア併合、同国東部における「親露派」分離をめぐる軍事衝突が続いており、チェコ特にプラハではウクライナへの支援メッセージが様々な場所で見られた。こうした経緯から、今回のロシア・ウクライナ戦争においてチェコでは全国的なウクライナ支援の様相を呈していることは特別驚くことではなかったが、それでも実際に街を歩いてみると、改めて同国におけるウクライナ戦争の影響の大きさを感じさせられた。

ウクライナ国旗は、市中心部はもとより、住宅地や工事現場においても掲げられている様子が確認できた（画像①）。あくまでも印象に過ぎないが、EU諸国の大使館や大学、美術館などの公的機関では、ウクライナ国旗掲揚率が高いように感じた。理由についてはこれも推測の域を出ないが、チェコの歴史的背景から、戦争反対というよりも対ロシアという意味でのウクライナ支援という要素が強いのではないだろうか¹。戦争前、コロナの最中にあった2020年4月、プラハのロシア大使館横の広場の名称が「ボリス・ネムツォフ広場（プーチン政権下で死亡したロシア人政治家）」に、戦争開始直後にはロシア大使館の住所が「ウクライナ英雄通り」（道はウクライナ国旗色に塗られている）という名称に変更されたことは、その象徴的事例と言えよう。

ウクライナの存在は交通機関においても感じる事ができた。トラムの停留所もよく見れば青黄の国旗色になっており、日常生活で否が応でも意識せざるを得ない。さらに、プラハ最大のフロレンツ・バスターミナルでは、ウクライナ方面のバスを扱うカウンターや旅行代理店が多く目についた（画像②）。戦争前から両国の結びつきは歴史的経緯（両大戦間期には現ウクライナ西部のザカルパッチャ州がチェコスロヴァキア領ポトカルパツカー・ルスであった）から、労働移民など多くの交流があった。2023年4月のデータによれば、チェコ国内のウクライナ人登録者数について、一時的保護の受給者が32万5266人、

¹ 2023年3月にチェコ共和国大統領に就任したペトル・パヴェルは、軍人出身でNATOの軍事委員長を務めた経歴を持ち、対ロシア戦争終結後のウクライナのNATO加盟支持の姿勢を示している。

https://www.nato.int/cps/en/natohq/opinions_214014.htm
(2023年11月1日閲覧)

合法的滞在とされるウクライナ人の数は 52 万 7268 人とされている (外国人全体の登録者数は 101 万 692 人)²。もっとも、2023 年夏現在ではチェコからウクライナへの帰国者数も増えているようであり、バスターミナルのカウンターはそうした状況を反映しているのかもしれない。

交通機関についてもう一つ興味深い事例として挙げられるのが、チェコの鉄道会社レギオジェット Regio Jet による、「ウクライナからの人道列車」と呼ばれる路線の広告だ (画像③)。HP によれば、この列車は戦争勃発直後から運行されており、現在では週 3 便、プラハからポーランドとウクライナの国境の街プシェミスルまで物資と避難民の輸送を行っている。プシェミスル発プラハ行きの列車は 240 ベッドの寝台車で構成され、ウクライナ市民と EU 市民の特に女性と子どもは「人道的理由」により無料で利用できるという。車内では食事も提供され、チェコ到着後は慈善団体によって宿泊も斡旋されるようだ³。このレギオジェット社は、いわゆる「上下分離方式」に基づいてチェコ国内および近隣諸国間に路線網を拡大し、安さとサービスの充実ぶりで人気を集めている。同社の親会社ともいえるステューデント・エージェンシー Student Agency 社は、高速バス運行と旅行代理店業によって、体制転換後の同国で最も成功した企業の一つとも言われており、今回の「人道列車」にそのような会社のアピールもあると見るのは穿ち過ぎだろうか。

2023 年 7 月時点での報道においても、毎週 2500 人ほどのウクライナからの避難民がチェコに到着しているが、実際の滞在期間は 150 日に限定されており、無償での宿泊利用者も限られているため、期間終了後はウクライナへの帰国を求められているという⁴。このような状況を踏まえると、チェコ国内のウクライナ系住民の出入りはかなり激しく流動的と言えるだろう。プラハ市内の地下鉄やトラムでは、ウクライナ系と思しき人々を数多く見かけたが、元々の住民なのか、戦争勃発後の避難者であるのかは判別がつかない。その両方の場合もあるだろう。また、当然ながらチェコ国内にはウクライナ人のみならず、ロシア人コミュニティやビジネスも数多く存在する。チェコからロシアへの帰国往来が困難になり、財産の心配をするロシア人も少なくないようだ。今でも観光地をはじめ、市内の各所でロシア人が経営する店は多いが、話している言語だけでは判別できない (ロシア語話者がロシア人とは限らない)。プラハでは、旧ソ連系飲食店の中でも「グルジア料理店」が比較的多いが、中には「ロシア名物」とされるペルメニ専門店と融合している場合もあり、さらにウクライナ国旗が張られるなど、部外者には混沌とした状況に見える。ロシア土産の代名詞ともいえるマトリョーシカは、プラハの観光地でもよく見かけた品だが、戦争開始によって消えたわけではなく、ロシア人経営の土産物屋では結構販売している様子を確認できた。もっとも、その中でも名物だったロシアソ連政治家をあしらったマトリョーシカは店頭から消えているように見えたが。

現状、ウクライナ戦争の早期終結の見込みは薄く、航空運賃の大幅な上昇に加え、日本よりも物価が高くなったチェコの状況を鑑みるに、2019 年以前のチェコ生活の「常識」が通用しなくなったことをまざまざと感じた今回の滞在であった。

² <https://www.ceska-justice.cz/2023/06/pocet-cizincu-v-cr-klesl-duvodem-je-navrat-ukrajincu/>
(2023 年 11 月 1 日閲覧)

³ <https://regiojet.cz/humanitarni-vlak>
(2023 年 11 月 1 日閲覧)

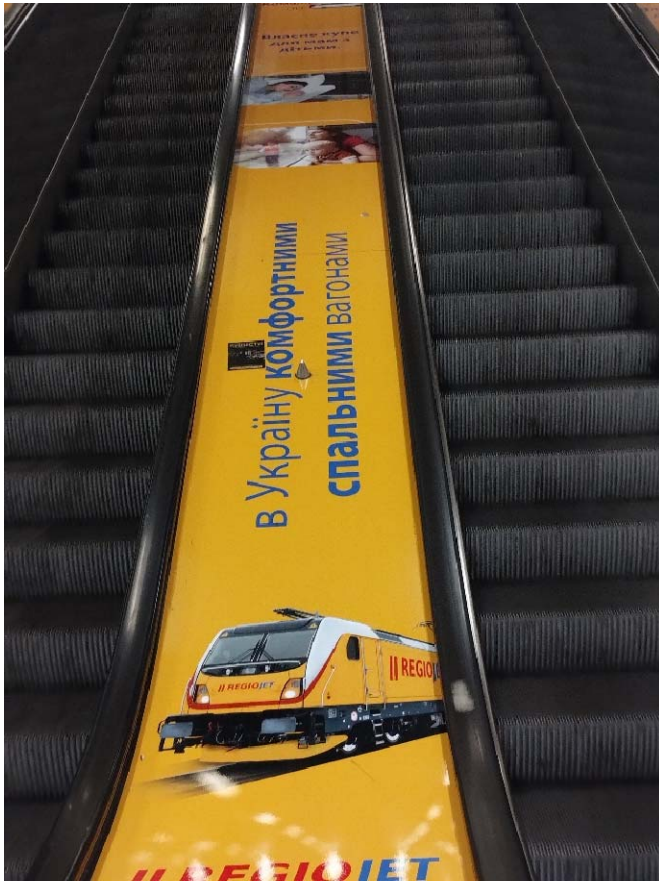
⁴ https://www.lidovky.cz/domov/ukrajinci-uprchlici-migrace-cr.A230718_105903_ln_domov_hud
(2023 年 11 月 1 日閲覧)



画像①：プラハ市内の住宅地に掲げられたウクライナ国旗



画像②：プラハ・フロレンツのバスターミナルに並ぶウクライナ方面のカウンター



画像③：ウクライナからの「人道列車」の広告（プラハ市内の駅構内）

画像はいずれも筆者撮影

送り出しと受け入れとの狭間で： 2023 年秋のブダペシュトにて思うこと

辻河 典子

はじめに

2023 年度は勤務校の在外研究制度を利用してイギリス・ロンドンとハンガリー・ブダペシュトに滞在している。本稿はブダペシュトに到着して 1 ヶ月余りが経った 11 月上旬に書いている。この街には博士課程在学中の 2008 年秋から 2010 年夏に長期で滞在したが、それ以後は 1 週間から 10 日程度の滞在が精一杯であり、前回訪れたのもコロナ禍前の 2019 年 2 月(しかもウィーンからの日帰り)であった。このため、街を散歩中に記憶と現実との齟齬を感じても、それが近年の実際の変化によるものなのか、あるいは単に私が忘れてしまっているせいなのか、恥ずかしながら判断できない時もある。

中東からバルカン半島を経由してヨーロッパへと向かう難民・移民は 2015 年以降 EU および加盟各国において深刻な課題となってきた。こうした難民・移民を自国のみならず「ヨーロッパ」全体への脅威と見なすハンガリー政府の方針は依然続いている¹。だが、近年のハンガリーが政治的・経済的に接近している中国やトルコなどのアジア系をはじめとして、この街を拠点として生活する人々のエスニシティが多様化していることは感じられる。本稿はこのエスニシティの多様化について差し当たって読んだり考えたりしたことをまとめたものである。

1. ハンガリーにおけるエスニシティの多様化

ハンガリー社会におけるエスニシティの多様化は、統計からも確認可能である。ハンガリーの中道系経済週刊誌 *hvg* (正式名称は *Heti Világgazdaság* [『週刊世界経済』]) は本年 10 月 26 日の号で、2022 年と 2001 年のハンガリーの国勢調査の結果を参照し、同国に 3 ヶ月以上長期滞在した外国籍の者に関するレビュー記事を掲載している。それによると、経済的により豊かな西部を中心にヨーロッパ、特に EU 加盟国から物価の安さに惹かれた移住者と、アジア・アフリカからの労働者という二つの特徴がある。外国籍の長期滞在者は 2001 年の約 9 万 3000 人から 2022 年の約 21 万 8000 人に増加したが、出身地域の割合も過去 20 年で変化した。ヨーロッパ系の人数の増加が 2 倍未満であった一方で、アジア系は約 5 倍に増加した。但し、2022 年の国勢調査によれば外国籍の長期滞在者は計 21 万 7945 名で、ヨーロッパ系は約 15 万人(うち EU 加盟国の者が約 9 万 2000 人で外国籍の長期滞在者全体の 42.1%)、アジア系は約 5 万 1000 人(同 23.5%)と、依然としてヨーロッパ系の

¹ 2023 年に入って中東・北アフリカからの難民・移民の数は再び増えており、シェンゲン協定加盟国間でもイタリア、そしてスロヴァキアとスロヴェニアで国境審査が強化されている。なお、10 月 7 日以降のガザ情勢を受けた変化については別途検討したい。

長期滞在の方が人数としては多い。アフリカ系の長期滞在者も、2001年の約1300人(長期滞在外国人全体の1.5%)から2022年には約7900人(同3.6%)へと増加している²。ハンガリー全体の人口が2001年の約1020万人から2022年には約960万人へと減少していることを考慮すると³、直近20年に限っても、ハンガリー社会におけるエスニシティの構成が多様化していることがうかがえる。

2. ハンガリーのゲストワーカーをめぐる諸事情: ユーロニュースの記事から

こうしたアジア系・アフリカ系の労働者はゲストワーカーたち[vendégmunkások]と呼ばれる。このゲストワーカーについて、ユーロニュースが2023年9月21日付(翌22日更新)で「強硬路線の移民政策にもかかわらず、ハンガリーは労働力の不均衡を埋めるために外国人を求めている」というタイトルで10分間の動画と共に記事を掲載している⁴。以下では動画の内容を紹介したい。

導入で紹介されるのは、近年外国人労働者の雇用を増やしている会社(匿名希望)で働くフィリピンから来た女性たちである。彼女たちは直接にはハンガリーの人材斡旋会社に雇われており、その人材斡旋会社が提供する宿舎で彼女たちへの取材が許可された。取材に応じた女性は昨年5月に来訪した。勤務先の会社では約100人のフィリピン人が働いているという。契約は2年間で、希望すれば更新できる。給与は月600ユーロで、彼女

² 以上, „Külföldiek Magyarországon: keletieknek munka, nyugatiaknak pihenés”, *hvg*, XLV. évf. 43. (2311.) sz., 2023. október 26., 11. old. アジア系長期滞在者では中国系が最も多く、次いでベトナム系、そしてインド系の人数が大きく増加している。Ibid.

³ ハンガリーで約10年ごとに実施されている国勢調査によれば、1980年の約1070万人をピークとして人口は減少に転じている。Központi Statisztikai Hivatal, „Népszámlálás 2022” <https://nepszamlalas2022.ksh.hu/> (2023年11月6日閲覧、本稿のURLは以下同じ。) 2010年代以降、オルバーン政権は人口減少や少子化への対策として住宅補助政策などを実施している。本稿はこの諸政策の詳細には立ち入らないが、キリスト教的価値観にもとづく伝統的家族主義(およびこれと連動する性的少数者の排除)と、難民・ロマ・貧困者などを排除するシステムが前提にある点は強調しておきたい。

⁴ Valérie Gauriat & Zoltan Siposhegyi, “Hungary calls for foreign nationals to bridge labour gap despite hardline immigration policies”, *Euronews*, September 21, 2023. <https://www.euronews.com/2023/09/21/hungary-calls-for-foreign-nationals-to-bridge-labour-gap-despite-hardline-immigration-poli> ユーロニュースは欧州放送連合のインシアティブで1993年に開設されたニュース専門放送局であるが、2021年12月にポルトガルを拠点とするベンチャー・キャピタルのアルパク・キャピタルが同局の株式の大半を取得することを発表して以降、ハンガリーの政権与党フィデスおよび同国首相オルバーン・ヴィクトルの影響が懸念されている。アルパク・キャピタルのCEOの父親はポルトガル社会民主党出身の元欧州議会議員で、1990年代初頭にオルバーンと知り合った。2010年代には欧州人民党内でフィデスの強力な支持者となり、オルバーンの外遊に同行したこともある。アルパク・キャピタルもブダペシュトに事務所を構えてハンガリーの大企業から資金を調達しており、2017年に地方への投資を目的とする基金を設立した際には、ハンガリー外相シーヤールト・ペーテルも式典に立ち会った。アルパク・キャピタルによる買収が明らかになった際、同社CEOはPOLITICOの取材に対してユーロニュースへの介入を否定する一方、所有者の変更に伴って編集部にも同社から選ばれた3名が参加することは認めている。なお、現在のハンガリー国内のメディアは多くが政権与党の影響下にあるが、近年ではオルバーン政権に近い実業家がスロヴェニアや北マケドニアなど国外のメディアにも投資を行っている。Samuel Stolton and Lili Bayer, “Euronews defends independence after buyout by Hungary-linked firm: Father of Alpac Capital’s CEO has close ties to Hungarian Prime Minister Viktor Orbán”, *POLITICO*, December 21, 2021. <https://www.politico.eu/article/euronews-independence-buyout-hungary-firm/>

2022年7月にアルパク・キャピタルによる買収が完了するタイミングで欧州放送連合加盟局のRTBF(ベルギー)、フランス・テレヴィジオン、RAI(イタリア)、SSR(スイス)も株式を売却しており、本稿執筆時のユーロニュースの株式はアルパク・キャピタル(97.6%)を筆頭に、アブダビのADMIC、モロッコのSNRT、マルタのPBSと併せた4社が保有している。«La RTBF n’est plus actionnaire d’Euronews», *Télépro*, 29 septembre 2022. <https://www.telepro.be/tv/la-rtbf-nest-plus-actionnaire-deuronews.html>; “About us”, *Euronews*. <https://www.euronews.com/about>

たちがフィリピンで得る場合の 2 倍以上の金額だという。彼女やその同僚たちは、宿舎の住環境が整っていることだけでなく、職場でもハンガリー人側に受け入れられていて差別を感じないということも述べている。なお、この女性はここで働くことがとても便利〔convenient〕であると話し、その理由として給与全額を自分の手にできることを挙げている。勤務先から支払われる給与がゲストワーカー本人に全額渡るわけではない人材斡旋会社が存在することが示唆されている。また、彼女が挙げた好待遇の例にシェンゲン・ビザによる域内の移動の自由が含まれていた点も興味深い。

では、なぜこのような外国人労働者が対移民強硬策を採るハンガリーで働いているのだろうか。それは昨春にオルバーン首相が今後数年間で 50 万の雇用創出の必要性を主張した一方で、外国人労働者が必要となることを認めていたためである。ハンガリーから西欧への労働移民は非常に多く⁵、地方では労働力の供給不足に陥っている。取材を受けた人材斡旋会社の CEO は、ハンガリーへの外国人労働者(ゲストワーカー)を月に数百人規模で主にアジアから呼んでいるという。彼によれば、ハンガリーではコロナ禍後の経済回復により失業率は 3.5% を下回っているが、投資需要の高まりから肉体労働・知的労働が前例がないほどに必要とされており、それゆえに会社の規模を問わず労働力を国外で見つけようとしているところが増えている。彼は「当座、第三国⁶からの各労働者がハンガリーの 10 の仕事を救っていると言うことができる」とすら述べ、もしゲストワーカーが来なかったとしても、雇用主は適切な人数と質の労働者を見つけるためにどの国に工場を建設すればよいかと真剣に考えなければならなかっただろうと考えている。

他方、労働組合の指導者には、こうしたゲストワーカーの拡大に懸念を示す者もいる。化学産業の労働組合連合の代表は、たとえ外国人を採用する雇用主がハンガリーの法律に従わねばならないとしてもゲストワーカーの権利の保護は依然として定かではなく、しかもハンガリー人労働者は失うものが最も多いと考えている。ハンガリー人の労働者と第三国からの労働者も賃金は同じであるが、雇用主がゲストワーカーや非ハンガリー人の労働者に対して宿舎や食事を提供する場合、その資金がハンガリー人労働者に賃金として支払われていればより多くのハンガリー人労働者が雇用されていたかもしれないからだ。この点は賃金交渉において最も深刻な対立であると彼は語っている。

ここで、取材者はこのハンガリー人労働者の雇用をめぐる問題がハンガリーではセンシティブなものとなっていると説明している(なお、この記事では新法でゲストワーカーの雇用が緩和される予定であるとされているが、この法律については 3. で述べる)。問題となっているのは巨大産業プロジェクト、とりわけバッテリー部門である。なお、ハンガリー政府はユーロニュースからの取材要請を断り、コンタクトを取った会社の中には無回答のところも複数あったという。

その無回答だった会社の一つが、ペシュト県のゲドにあるサムスン電子系列のバッテリー工場である。工場の近隣住民は騒音、汚染、環境への影響(例:工場の拡張工事に伴う騒音と自然破壊、交通量の増加、転入してきた韓国人など外国人労働者との間での生活習慣の違いによると思われるトラブル、罰金処分に科されても改められない環境・安全規約違反など)だけでなく、地域住民の雇用が不十分であることへの反発も訴えている。

次に紹介されるのが、南部チョングラード県のキシテレクにある電気ケーブル工場である。この工場はイタリアの電気・通信ケーブル会社プリズミアンの系列で、ハンガリーおよび近隣諸国だけではカバーできない労働力

⁵ ユーロニュースの記事では労働のためにハンガリーを離れた者は推計 70 万人としている。Gauriat & Siposhegyi, “Hungary calls for foreign nationals to bridge labour gap despite hardline immigration policies”.

⁶ 非 EU 加盟国、および市民が EU 域内の移動の自由を享受できない国または地域のこと。欧州委員会のウェブサイトに掲載されている英語版の定義は以下を参照。https://home-affairs.ec.europa.eu/networks/european-migration-network-emn/emn-asylum-and-migration-glossary/glossary/third-country_en

不足を補うためにインドネシアからの労働者約 60 名が昨年からは働いている。ハンガリーにあるプリズミアンの子会社の人事主管は、ゲストワーカーの雇用は、短期的には労働力不足と一貫して生じている離職への対応が理由であるが、長期的には超過勤務とそれがもたらす労働条件の更なる悪化を回避して労働力を安定化させるためであると説明する。この工場ではゲストワーカーが職場に溶け込んで受け入れられるように、語学講座、文化交流、訓練、祈祷室などが用意されている。

この工場では働いて 1 年になるインドネシア人男性は、メンターであるハンガリー人のベテラン技師から期待を寄せられている。このベテラン技師によれば、彼も含めてハンガリー人側はインドネシアからの労働者の受け入れを懸念していたが、多くが認識を数日で好転させたという。彼は、この地域のハンガリー人の若者が 1 日 12 時間、週末勤務もあるこの工場では働きたがらないという事情も紹介している。インドネシア人男性は勤務が大変であることは認めつつも、周囲からのサポートを得ていることをポジティブに語る。彼の給与額はインドネシアでの 3 倍であり、長期滞在と技師になることを希望しているという。

最後に先の人事主管が再び登場し、この工場での取り組みはパイロット・プロジェクトであり、他国にも拡大するつもりであることを述べている。彼らは既にインドネシア人労働者をチェコとルーマニアにも提供しているが、ヨーロッパ全体のプリズミアン社のコンソーシアム内で技術訓練を受けた労働者を組み込んでいく構想を持っているとのことである。

以上の動画からは、体制転換後に多くがグローバル企業の系列となったハンガリーの製造業において、製品生産だけでなくその生産に従事する労働力の供給も世界規模で階層化が進行していること、そしてゲストワーカーの受け入れ拡大を通じてハンガリーの製造業がその階層化に急速に組み込まれていることを読み取ることができる。

3. 「ゲストワーカー法」

2023 年 9 月下旬にこの記事が公開された当時は、11 月からゲストワーカーの就業に関する法律(通称「ゲストワーカー法」)が施行予定であった。この法律はゲストワーカーの雇用保障は 2 年間(1 年間は更新可)と定めていた⁷。しかし、10 月 5 日に経済発展省は同法を取り消し、滞在規定を厳格化した新たな法律を今後制定させることを表明した⁸。

本稿執筆時点でまだ法案の審議は進んでいない。しかし 11 月 6 日に国会で中道左派系野党の民主連合に所属する議員から、現在ハンガリーに何百人ものゲストワーカーを招いている政府が、難民をハンガリー人の職を奪う存在として大々的にアピールするキャンペーンを過去に行っていたことを指摘されたオルバーンは、近いうちに新法の審議を始めることに言及しつつ、「ハンガリーは今後もハンガリー人のものであり、ゲストワーカーたちはハンガリー人の労働力では埋められない仕事場でのみ受け入れる」と述べたと報じられている⁹。

おわりに

グローバル化が進む現在、政府にとって「好ましい／好ましくない」という基準で外国人の受け入れが左右さ

⁷ „2023. évi törvény: a vendégmunkások magyarországi foglalkoztatásáról”, Nemzeti Jogszabálytár <https://njt.hu/jogszabaly/2023-50-00-00>

⁸ „Vendégmunkások: Megijedt törvényalkotó”, *hvg*, XLV. évf. 41. (2309.) sz., 2023. október 12., 10.old.

⁹ „Orbán: „Magyarország továbbra is a magyaroké”, benyújtjuk az új vendégmunkástörvényt”, *hvg.hu*, 2023. november 6.

https://hvg.hu/itthon/20231106_Orban_Magyarország_tovabbra_is_a_magyarok_e_benyujtjuk_az_uj_vendegmunka_storvenyt

れる移民政策は、決してハンガリーに限った話ではない。しかし、移民を送り出してきた長い歴史を持つ国が、その移民送別の側面を引き続き残しながらも、世界規模で労働力の移動が構造化される中で移民の受け入れ国としての側面も併せ持つようになったという点で、ハンガリーは新しい局面を迎えている。ポピュリズム的な政治路線を採るオルバーン政権は、周辺国で民族的少数派として在住するハンガリー語話者も含めてハンガリー・ネーションとしての一体性を政治理念として重視する一方、新自由主義の影響を受けて、国内在住者でもロマ、貧困者、性的少数者などに対して厳しい姿勢で臨んできた¹⁰。こうしたハンガリー社会におけるゲストワーカーの位置づけにはどうしても悲観的な見通しを持ってしまいが、グローバル化の最前線の一例として今後も注視していく必要があるだろう。

¹⁰ オルバーン政権の諸政策の原理を整理した研究として、姉川雄大「ハンガリーの歴史認識と現代政治——「ヨーロッパ」性と新自由主義・人種主義政治——」、橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題——ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤——』、ミネルヴァ書房、2017年、195-216頁がある。また、オルバーン政権は2013年1月から2017年3月にかけてハンガリーへの永住資格の取得の簡略化を見返りとした高額な国債(25万ユーロ、後に30万ユーロ)を販売した。主な対象は中国人投資家であり、実際に購入者の圧倒的多数は中国籍の者であった。また、次点で多かったロシア国籍の購入者にプーチン大統領に近い者が含まれていたことが指摘されている。国籍を持たない者の滞在資格を管理することは近代国民国家にとって最重要課題の一つであるが、富裕層に有利な滞在資格管理を一時的であれ導入したことはオルバーン政権の新自由主義的政策の一例と評価することが可能であろう。 <https://www.residency-bond.eu/residency-bond-program.html>; Roman Slejnov, erdelyip, Zöldi Blanka, „Putyin gépezetének tagjai kaptak magyar papírokat Orbánék kötvényprogramjában”, 444.hu, 2018. szeptember 18. <https://444.hu/tldr/2018/09/10/putyin-gepezetenek-tagjai-kaptak-magyar-papirokat-orbanek-kotvenyprogramjaban>; Országgyűlés Hivatal irómanyszám: K/6396/1 (Pintér Sándor, „Válasz Szabó Tímea (független) K/6396. számon és K/6397. számon benyújtott írásbeli kérdéseire”) <https://www.parlament.hu/irom40/06396/06396-0001.pdf>

会員近況報告

今号では会員近況報告欄を休止いたします。

執 筆 者 一 覧

JA 日下 明治学院大学文学部准教授

森下 嘉之 茨城大学人文社会科学部准教授

辻河 典子 近畿大学文芸学部准教授

編 集 後 記

まず今号に論文や文章を投稿してくださった皆様、誠にありがとうございました。日下会員による論文には勉強をさせていただきました。森下会員、辻河会員によるエッセイも、世界の今、を知るうえで重要な知見が詰め込まれているように感じました。これを一つの足がかりとして、各位の研究がさらなる発展をとげることを、心より祈っています。

今年はいわゆる「コロナ禍」が終わったようになっていて、会員のみなさまとも三々五々、会う機会が増えてきました。対面の研究会や読書会を復活したいという希望も聞かれるようになりますが、諸般の事情で、なかなか復活できずにいます。

何が「コロナ禍」だったのか、本当に「コロナ禍」が終わったのか、今になっても疑問が拭いきれず、喪失感だけが残っている気がしています。喪失「感」だけならばともかく、実際何かを失ってきた気がします。それなりにできることはしてきたつもりですが、「コロナ禍」をめぐる世間の動きに対する疑問符は増えるばかりです。

(松岡 格)

ENSG (Ethnicity, Nation, State, and the Globe) No.7

エスニック・マイノリティ研究 第7号

発行：2023年 11月 30日

ISSN 2432-9576

編集委員（名字五十音順）:

遠藤嘉広、JA 日下、栗林大、香坂直樹、辻河典子、森下嘉之、

松岡格（編集長）

発行所：エスニック・マイノリティ研究会

〒340-0042 埼玉県草加市学園町 1-1

獨協大学国際教養学部 松岡研究室内

URL: <https://sites.google.com/site/emstudies/home/ensg>

ENSG に掲載された論文等の著作権は著者と編集委員会がともに保持する。無断転用・転載を禁じる。
Copyright ©2023 by individual author and ENSG Editorial Board. All Rights Reserved. This material may not be published or reproduced without permission.